Think globally, Act locally

2019
11.10-11.16

China

文部科学省委託 2019 年度初等中等教職員国際交流事業

中国教職員招へいプログラム 実施報告書

ACCU 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

文部科学省委託 2019 年度初等中等教職員国際交流事業

中国教職員招へいプログラム

実施報告書

東京都・千葉県・宮城県気仙沼市

2019 年 11 月 10 日(日) ― 11 月 16 日(土)

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ＡＣＣＵ）

はじめに

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU: Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO）は、ユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、文化と教育の分野において地域協力・交流活動を推進しています。

ACCU は主にアジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的とし、日本政府および国際連合大学の協力のもと、2001 年より教職員の国際教育交流事業を開始しました。この国際教育交流事業は、日本と韓国、中国、タイおよびインドとの間で行われ、これまでに4千人近くの海外教職員を日本へ招へいし、また日本からは 1 千人近くの教職員を海外に派遣してきました。これにより、日韓・日中・日泰・日印間で、多くの教職員間交流および学校間交流が生まれ、これらの国々の相互理解と友好の増進に大きく貢献してまいりました。

日中間の国際交流事業としては、国際連合大学（UNU: United Nations University）の委託を受けて、文部科学省、中国教育部の協力のもとで国際教育交流事業「中国教職員招へいプログラム」が実施されました。2002 年から始まったプログラムを通して、これまでに延べ 1,707 名の中国教職員を日本に招へいしてきました。

翌 2003 年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年 10 名程度の日本教職員を中国へ派遣してきました。これらの交流事業の成果が中国政府に評価され、日中国交正常化 35 周年を記念する 2007 年からは中国の教育部による招へいプログラムとして、参加人数を倍増し、日中教職員相互交流のさらなる発展を目指して実施されるようになりました。

今年度は、文部科学省委託事業「2019 年度初等中等教職員国際交流事業」の一環として、2019 年 11 月 10 日から 11 月 16 日に中国より初等中等教育に携わる教職員を 25 名招へいしました。中国教職員の受入れにあたっては、おかげさまでこれまで中国政府による日本教職員派遣プログラムに参加したことのある方のご協力もいただき、交流を継続させることができました。

中国の先生方には文部科学省にて、本邦における初等中等教育の概要、消費者教育、特別支援教育およびユネスコスクールを通じた ESD（持続可能な開発のための教育）や国連サミットで採択された持続可能な開発目標（SDGs）に関する説明を受けたのち、千葉県および宮城県気仙沼市の学校および教育文化施設等の訪問、教職員や生徒との交流を通じて、各地における教育の現状と課題、訪問地域の教育の特徴をご覧いただきました。気仙沼市は、市を挙げて ESD に取り組んでいる地域であり、環境教育に加え、防災や海洋教育にも広がりをみせています。3 日間の滞在中に、グローバルな視点と地域や児童生徒の日常生活を結び付けたグローカルな教育に力を入れている学校の取り組みをご紹介いただきました。短い期間ではありますが、日中双方の関係者にとって教育や教育現場に対する理解を深めることはもとより、帰国後の諸活動を通じて日中の教員間、学校間の交流のいっそうの発展に役立つよう願ってやみません。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました、中国教育部、中華人民共和国駐日本国大使館、文部科学省、及び、千葉県立流山おおたかの森高等学校、気仙沼市教育委員会、気仙沼市立鹿折小学校、宮城県立気仙沼高等学校、気仙沼市立階上中学校をはじめ、関係者の皆様には厚く御礼申し上げます。

2020 年 1 月

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

目 次

1. プログラム概要 …… 1

2. 実施内容・訪問記録 …… 9

3. 参加者アンケート …… 30

4. 関係者コメント …… 48

訪問校や受入機関 …… 49

事業担当者 …… 55

付録 プログラム写真 …… 57

新聞記事 …… 63

訪問団の報告会資料 …… 64

過去のプログラム実績 …… 68

Ⅰ.プログラム概要

プログラム概要

1. 実施の背景

ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、「戦争は人の心で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」とするユネスコ（UNESCO: 国際連合教育科学文化機関）の理念に沿って、多様な文化が尊重される平和な社会の実現を使命として 1971 年に設立され、教育と文化の分野においてアジア・太平洋地域の連携・交流および持続可能な社会の実現を推進する団体としてさまざまな事業を展開してきました。子どもたち・学校・地域への波及効果が高い、学校の教職員を対象にした国際交流事業には 2001 年より携わり、「先生が変わる 子どもが変わる 未来が変わる 学びの場」づくりを担っています。

日本と中国との間の国際交流事業としては、2002 年より中国から初等中等教育教職員を招へいプログラムを開始し、2003 年からはさらなる交流を促進するため、日本の初等中等教育教職員が中国を訪問するプログラムを実施してきました。これにより、2019 年 6 月までに、併せて 2 千人以上の日中教職員が双方の国より派遣されました。

本年度は文部科学省、中国教育部、気仙沼市教育委員会、各訪問校の協力により、2019 年 11 月 10 日（日）から 16 日（土）までの 7 日間に渡り、中華人民共和国から初等中等教育教職員 25 名を本邦に招へいします。

2. 目的・期待される成果

本プログラムは、下記の活動を通じて教職員が相手国に対する理解を深め、お互いに学び合い、さらに自国の教育現場において国際理解や持続可能な社会への取り組みを促進することで、ひいては日中両国の相互理解と友好の促進および持続可能な社会の実現に繋げることを目的としています。

プログラムの成果として、教職員が自国の教育現場においてプログラムからの学びを児童生徒に還元すること、日本と中国の学校間の持続的な国際交流を育むこと、国際理解や持続可能な社会への取り組みを推進する担い手となることなどが期待されています。

3. 活動内容

- 日本の教育制度および教育政策についての研修
- 日本の学校およびその他の教育・文化施設の視察
- ESD（持続可能な開発のための教育）等を含む特色ある取り組みの視察
- 教職員および児童生徒との交流・意見交換

4. 日程

日付	日程	訪問先	活動
11 月 10 日（日）	第 1 日	東京	・日本到着 ・オリエンテーション ・開会式・歓迎交流会
11 月 11 日（月）	第 2 日	東京	・文部科学省表敬訪問・講義 ・学校訪問①
11 月 12 日（火）～	第 3-5 日	宮城県気仙沼市	・気仙沼市へ移動 ・気仙沼市教育委員会表敬訪問や

11 月 14 日（木）			訪問地教育事情概要説明 ・学校訪問②～④（授業見学、教員・ 児童生徒との交流） ・教育文化施設・史跡視察など
11 月 15 日（金）	第 6 日	宮城→東京	・東京へ移動 ・報告会、閉会式
11 月 16 日（土）	第 7 日	羽田空港	日本出発

5.参加者数

25 名

6. 参加資格

（1）中華人民共和国の国籍を有すること。
（2）所属する学校等からの推薦を受けた、中華人民共和国の初等中等教育の教職員であること（教育行政官及び教育専門家を含む）。
（3）プログラムを通じて、日本の教職員と教育経験に関して積極的に意見交換し、活動に携わること。
（4）プログラム参加後は、教育現場において国際理解および日中交流の推進に取り組むこと。
（5）健康で、プログラムの全日程に参加が可能であること。
（6）中国語（普通話）での会話が可能であること。

なお、参加者は以下の者が望ましい。
①45 歳以下で教員経験 3 年以上の者。
②国際理解教育、ESD（持続可能な開発のための教育）等に高い関心を持つ者。
③日本の教員、児童生徒、学校との交流の機会を求めている者。

7.渡航費等諸経費

ACCU は下記の経費を負担する。
（1）宿泊と食事：
　プログラム期間中の日本国内の宿泊（朝食含）、およびプログラム期間中の食事。
　（食事が提供されない場合については、定額の食費を支給する。）
（2）日本国内の移動旅費：
　プログラム期間中の国内移動旅費（自由行動時以外）。

※日本と中国の往復国際航空運賃は中国政府が負担する。

8. 通訳

公式プログラム期間中は原則として日本語と中国語（普通話）間の逐次通訳が行われる。

プログラム日程

日にち	時間	内容	宿泊
11/10（日）	08:35-12:50	北京首都国際空港発-羽田空港着（CA181）	ハートンホテル東品川 東京都品川区東品川 4-13-27 Tel:03-5495-0810
		ホテルへ移動（車中軽食）	
	15:00-15:30	ホテル着、チェックイン	
	15:30-16:30	オリエンテーション	
	17:30-19:20	開会式・歓迎交流会	
11/11（月）	08:40	ホテル発	
	09:30-11:30	文部科学省表敬訪問、講義	
	13:00-16:50	千葉県立流山おおたかの森高等学校訪問（昼食を含む）	
	18:30	ホテル着、夕食（各自）	
11/12（火）	07:50	各自チェックアウト、ホテル出発	ホテルパールシティ気仙沼 宮城県気仙沼市古町 3-2-42 Tel: 0226-24-2511
	08:48-11:23	東京駅発～一ノ関着（やまびこ 43 号）	
		昼食、ホテル到着、チェックイン	
	15:30-17:30	気仙沼市教育委員会表敬訪問、オリエンテーション	
	18:45-20:30	夕食	
11/13（水）	07:50	ホテル発	
	08:10-09:20	魚市場見学	
	09:30-17:00	気仙沼市立鹿折小学校訪問（給食を含む）	
	17:15	ホテル着、夕食（各自）	
11/14（木）	07:50	ホテル発	
	08:20-11:30	宮城県立気仙沼支援学校訪問	
	12:00-15:30	気仙沼市立階上中学校訪問（給食を含む）	
	15:50-17:10	東日本大震災遺構・伝承館見学	
	17:40-18:20	情報共有会（気仙沼市教育委員会にて）	
	18:30	ホテル着、夕食（各自）	
11/15（金）	08:00 まで	チェックアウト、ホテル出発	ハートンホテル東品川 東京都品川区東品川 4-13-27 Tel:03-5495-0810
	09:48-11:56	一ノ関駅発～東京駅着（はやぶさ 108 号）車中昼食	
		ホテルへ移動	
	14:00-17:00	報告会・閉会式	
	17:00	チェックイン、夕食（各自）	
11/16（土）	04:45	ホテル出発①（成田空港利用者）	
	06:15	ホテル出発②（羽田空港利用者）	
	08:30-11:45	羽田空港発～北京空港着（CA184 便）	
	08:55-11:30	成田空港発～上海空港着（CA158 便）	

【文部科学省講義担当】

文部科学省 初等中等教育局国際企画調整室専門官 弓岡美菜

文部科学省 国際統括官付ユネスコ振興推進係長 福本倫

参加者リスト

No.	氏名	所属	職名	役割
A-01	兪偉躍	中華人民共和国教育部	基礎教育司副司長	団長
A-02	張輝武	中華人民共和国教育部	基礎教育司総合処処長	秘書長
A-03	宋懿琛	上海市教育委員会	副処長	
A-04	張瑾	上海市普陀区甘霖初級職業技術学校	書記校長	
A-05	朱彤吉	上海市甘泉外国語中学校、高校	教導処副主任	
A-06	厳熙	上海市莘荘高校	副校長	
A-07	張静	上海市閔行区田園外国語実験小学校	教師発展部主任	
A-08	張彩萍	上海市嘉定区馬陸小学校	副校長	
A-09	張勤	上海市嘉定区普通小学校白銀路キャンパス	副校長	
A-10	陳肖前	上海市嘉定区留雲中学校	副校長	
A-11	王磊	雲南省教育庁	主任課員	
A-12	陳芸	蒙自市第一高校	党委員会副書記	
A-13	李新龍	個旧市第一高校	副校長	
A-14	黄城	開遠市第五中学校	党総支部委員会副書記	
A-15	王燚	弥勒市第三中学校、高校	校長	
A-16	易新艷	建水第四中学校、高校	副校長	
A-17	趙学成	石屏県冒合中学校	校長	
A-18	謝勇	瀘西市三塘郷中学校	校長	
A-19	馬義三	云南省紅河州紅河県迤薩鎮中心完小	校長	
A-20	張永林	紅河州元陽県沙拉托中学校	副校長	
A-21	普義則	緑春県大興小学校	校長	
A-22	冉紅艷	金平ミャオ族ヤオ族タイ族自治県第一小学校	校長	
A-23	黄興祥	紅河州屏辺ミャオ族自治県湾塘中心学校	校長	
A-24	李富保	河口県城区小学校	校長	
A-25	趙鵬麒	紅河ハニ族イ族自治州第一中学校	学年主任	

プログラム関係機関

(1) 全体プログラム

① 文部科学省 大臣官房国際課

〒100-8959 東京都千代田区霞が関 3-2-2
Tel: 03-6734-3046 Fax: 03-6734-3669
URL: http://www.mext.go.jp/en/

奈良 哲
Mr. NARA Satoshi
文部科学省 大臣官房国際課 課長

② 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-32-7F
Tel: 03-5577-2853 Fax: 03-5577-2854
Email: accu-exchange_ml@accu.or.jp URL: http://www.accu.or.jp

田村 哲夫
Mr. TAMURA Tetsuo
理事長

進藤 由美
Ms. SHINDO Yumi
国際教育交流部長

伊藤 妙恵
Ms. ITO Tae
国際教育交流部プログラムスペシャリスト
（本プログラム担当）

天満 実嘉
Ms. TEMMA Mika
国際教育交流部事務専門員

高松 彩乃
Ms. TAKAMATSU Ayano
国際教育交流部プログラムスペシャリスト

藤澤 弥生
Ms. FUJISAWA Yayoi
国際教育交流部事務専門員

岡野 晃一
Mr. OKANO Koichi
国際教育交流部プロジェクトスペシャリスト

劉 洋
Mr. LIU Yang
プロジェクトスタッフ

林 麗桂
Ms. LIN Ligui
プロジェクトスタッフ

曹 星怡
Ms. CAO Xingyi
プロジェクトスタッフ

③ 中華人民共和国教育部国際協力交流局アジア・アフリカ課

100-816 中国北京市西単大木仓胡同 37 号
Tel: +86-10-6609-6524

④ 中華人民共和国駐日本国大使館 教育部

〒135-0023 東京都江東区平野 2-2-9
Tel: 03-3643-0305　Fax: 03-3643-0296

(2) 地域受入プログラム

気仙沼市教育委員会

〒988-8501 宮城県気仙沼市八日町 1-1-1
Tel: 0226-22-6600　Fax: 0226-24-3566
URL: https://www.kesennuma.miyagi.jp/li/life/040/070/index.html

小山 淳	小野寺 裕史
Mr. OYAMA Atsushi	Mr. ONODERA Hirofumi
教育長	学校教育課 副参事（指導主事）

(3) 訪問校

千葉県立流山おおたかの森高等学校

〒270−0122 千葉県流山市大畔275−5
TEL:04−7154−3551 FAX:04−7155−6991
URL: https://cms2.chiba-c.ed.jp/n.otaka-h/

勝井 洋一	仲田 郁子
Mr. KATSUI Yoichi	Ms. NAKADA Ikuko
校長	教諭

気仙沼市立鹿折小学校

〒988-0817 宮城県気仙沼市西八幡町 54-1
TEL:0226-22-6876 FAX:0226-22-6878
URL: http://www.kesennuma.ed.jp/shishiori-syou/

淺野 亮	尾形 順子
Mr. ASANO Ryo	Ms. OGATA Junko
校長	教諭／教務主任

宮城県立気仙沼支援学校

〒988−0141 宮城県気仙沼市松崎柳沢216−7
TEL:0226−24−3019 FAX:0226−24−4519
URL: https://keyou.myswan.ed.jp

西城　長一	及川　樹美
Mr. SAIJO Choichi	Ms. OIKAWA Shigemi
校長	主幹教諭

気仙沼市立階上中学校

〒988-0238　宮城県気仙沼市長磯中原125
TEL:0226−27−2304 FAX:0226−27−2919
URL: http://www.kesennuma.ed.jp/hashikami-cyuu

菅原 定志	高須 由美
Mr. SUGAWARA Sadashi	Ms. TAKASU Yumi
校長	教頭

2. 実施内容・訪問記録

1. 全体プログラム（東京）

11 月 10 日（日）午後① オリエンテーション

団長・兪偉躍氏（教育部基礎教育司副司長）、および秘書長・張輝武氏（教育部基礎教育司総合処処長）率いる 25 名の訪問団は 2019 年 11 月10日（日）に来日した。訪問団は到着後、東京都のハートンホテル東品川に移動し、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）によるオリエンテーションを受けた。オリエンテーションでは、プログラムの説明、滞在中の注意事項の説明、ACCU スタッフの紹介等があった。

11 月 10 日（日）午後② 開会式・歓迎交流会

同日夕方、ハートンホテル東品川にて開会式・歓迎交流会が行われた。初めに、文部科学省大臣官房国際課の奈良哲氏、中華人民共和国駐日本大使館の胡志平氏、中国教職員訪問団団長の兪偉躍氏からそれぞれ挨拶があった。文部科学省の奈良氏は、2019 年を「日中青少年交流推進年」として両国の交流が推進されていることや、安倍首相の訪中、習近平国家主席の訪日にも触れ、平成から令和へと新しい時代へ移り変わるときに、さらに強固な日中関係が構築されていると述べ、今回の訪問をきかっけに、これからの社会を担う子供たちに、日中友好の精神を継承していただくことを期待していると語った。

挨拶の後は、文部科学省の奈良氏と団長兪氏、および ACCU の杉江理事と団長兪氏の間で記念品が交換され、その後 ACCU の杉江理事の乾杯の音頭で食事と歓談が始まった。乾杯にあたって、杉江理事からは、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の後、今回の訪問地の一つである宮城県気仙沼市の復興に携わったエピソードも語られた。会の途中では、2019 年度中国政府日本教職員招へいプログラムに参加した教員による歓迎の歌の披露も行われた。最後に、国際教育交流部部長の進藤による閉会の挨拶で開会式・歓迎交流会は締めくくられた。

開会式・歓迎交流会には、過去の中国派遣プログラム参加者の日本人教職員も参加した

11 月 11 日（月）午前 文部科学省表敬訪問

文部科学省の表敬訪問では、始めに大臣官房国際課国際戦略企画室長補佐の松永佳子氏が挨拶をし、今回の訪問地である宮城県は 2011 年の東日本大震災を受け、現在は防災教育等に大変力を入れていることに触れ、世界の共通課題でもある防災教育をはじめ、日本の取組が、中国での実践にとって役立つものであると信じていると述べた。

訪問団長の兪氏は、中国は人口大国であり、世界最大規模の基礎教育を有していることに触れ、農村部都市部の教育の均一化、知識重視で能力軽視の教育から新たな変革の時を迎えており、これから日本の取り組みを学べることに期待している旨が語られた。

続いて、初等中等教育局国際企画調整室専門官・弓岡美菜氏より日本の初等中等教育の概要に関する講義が行われ、学校体系、義務教育制度、教育行政における国・都道府県・市町村の役割分担、教育委員会制度の仕組みと趣旨、日本の教育の特徴等について説明があった。また、国際統括官付ユネスコ振興推進係長・福本倫氏より、日本における ESD およびユネスコスクールに関する講義が行われた。

Q&A（抜粋）

Q：学校給食について、中国では特に貧しい地域では、朝食の給食も行われている。日本では、地域に根差したメニューを給食に取り入れる等いい取り組みだと思うが、日本での食育とはどのようなものか？

A：色々な考え方があるが、最近では「社会に開かれた教育」の一貫として行うことが多い。例えば、地元

の企業や自治体と連携して、子どもたちが、生産・加工・販売まで行い、食べ物がどこからくるのか、食べ物にまつわる経済活動はどのようなものか学ぶことができるようにしている。以前は、地元で何が採れるのか、どんな栄養があるのかということを学ぶにとどまっていたが、拡大してきている。また、日本でも経済的に困難な家庭の子どもむけに、無償もしくは低価格で食事を提供する「こども食堂」といった取り組みが、まずは民間の間で始まっている。

Q：教員資格の 10 年の期限がきれたあとはどのように更新するのか？
A：指定された大学で講義を受けて、レポートを提出して認められれば更新することができる。新しいアカデミックな知識を身に着けてもらうことを目的にしている。

Q：学校の評価はどのように行うのか？
A：政府が、学校自体を直接評価する制度はない。（1）自己評価（2）関係者評価（職員、保護者等）（3）第三者評価の三種類があり、文科省はガイドラインを示している。教育委員会の推薦をうけて、大臣賞を表彰している。

11 月11日（月）午後　千葉県立流山おおたかの森高等学校

訪問スケジュール

13:10 -14:00	昼食、学校紹介映像視聴
14:00 -14:25	校内見学
14:35 -14:45	中国語選択生徒による挨拶
14:45 -15:30	教育交流会
	テーマ①国際理解教育
	テーマ②学力向上にむけて
15:35 -15:45	閉会、記念品贈呈、記念撮影
15:50 -16:20	部活動見学（剣道部、野球部）
16:20 -16:50	訪問団情報共有会

教育交流会の様子

学校の特色、特記事項

千葉県流山市中部に位置する全日制、男女共学の公立高校であり、普通科に加えて、県内で唯一、国際コミュニケーション学科を持つ。2012 年には、ユネスコスクールに認定され、外国語教育や国際理解教育にも力を入れている。2 年生からは第二外国語として中国語か韓国語を選択し、学んでいる。部活動もさかんで、アーチェリー部やアナウンス映像部などは全国レベルの活動を続けている。アナウンス映像部作成の学校紹介映像では、学校行事や部活動に熱心に取り組む生徒たちの様子が紹介された。また、中国語を学習している生徒が中国語で挨拶をすると、訪問団から大きな拍手が送られた。訪問団は、日本の典型的な学校生活や同校独自の様々な取り組みについて知る機会となった。

教育交流会 ①国際理解教育

冒頭、国際部の渡辺勉教諭より、当該校の 1 年間の国際理解教育や外国語教育の取り組みについて紹介された。近隣の留学生との交流や、台湾やインドネシアの高校生の訪問受け入れ、オーストラリアでの 2 週間の語学研修、グアムへの研修旅行などを通して、学習した言語を使って実際にコミュニケーションをとる機会を設けていることが紹介された。また、国際コミュニケーション科では、近隣の小学校を訪問し、同校生徒が教師役になって小学生に英語を教える「高校生が先生」という行事や、ボランティアで小学校を訪問して英語教員の補助を行う活動が紹介され、教えることを通して学ぶ取り組みが紹介された。

その後、中国訪問団からは朱彤吉教導処副主任の所属校である上海市甘泉外国語中学校、高校の外国語教育の取り組みについて紹介がなされた。当該校では、外国学生部という留学生の受け入れを専門としている部署があり、毎年 12 か国以上から約 80 名の学生を受け入れており、その大部分は日本からの留学生である。また、1972 年から第一外国語として日本語を教えている実績もあり、日本の学生とのコミュニケーションは日常的に行われている。また、生徒たちも積極的に日本語を学んでいると説明された。 その後質疑応答がなされた。（以下抜粋）

Q: どのレベルまで達成させるという明確な目標はあるか？目標がないと、クラブ活動のようになってしまい努力しなくなるのではないか。

A: 中国語検定試験の 4 級に受かるレベルまでもっていきたいという希望はあるが、他科目の学習もあるので、楽しみながら中国語を学んでほしいという思いの方が大きい。

Q: 教員のなかで中国語を話す職員はどのくらいいるのか？
A: 中国語の授業は、麗澤大学大学院の先生 1 名にお願いしている。アシスタントとして、当該校の丹野教諭が参加している。

Q: 中国語に興味を持てるような体験的な活動はあるか？
A: 映画を見せたり、実際の中国の映像を見せたりしたいと計画しているが、まだ実現できていない。教科書を読んだり、話す練習をしたりする活動がメイン。

外国語教育専門の教員間でのさらなる交流や、ICT を活用した教材交流が約束されて閉会となった。

教育交流会 ②学力向上に向けて

国際部の長谷川郁世教諭の司会により始まり、山本晴久教務主任（教科は社会）によって話題提供がなされた。中国と比べると日本は大きくないが、学校によって状況は違うこと、事例は流山おおたかの森高等学校のものであること、学力向上の取り組みが今年で 4 年目であることが伝えられた。入学してくる生徒の変化を背景に、学力試験だけで中堅大学に合格できるように取り組んできたことが共有された。その後、中国訪問団からの質問に答える形式で進められた。その内容（抜粋）は次のとおりである。

Q: 2 年生の修学旅行は学校として実施しているのか。そして、修学旅行は学力向上につながるのか。
A: 修学旅行は部活動を含め授業以外の活動として位置付けられている。かつては、生活状況が貧しく旅行できない家庭の子どもにも見聞を広げる機会を与えるためであった。現在は豊かになり、かつてとは違った意味をもっている。集団行動やその他日常以外の学びを深める機会となっている。学力向上とのつながりは、学力をどのように定義するかによる。単純にテストの点を上げて、良い大学に入るという点で言えば、修学旅行や部活は弊害かもしれない。しかし、本校では教室で学べないことを学べる機会と捉え、さまざまな活動を通じて達成感等を味わい、人間としてのスキルを向上させると考えている。
（この後、A-25 趙鵬麒氏は、自身の勤務校では修学旅行や部活が考えられない状況であり、楽しむ機会がない。保護者が良い学校に入ってほしいと願っており、保護者も教員も競争を強いられていることを補足した。）

Q: 中国の習近平は 2020 年までにややゆとりのある教育の構築や 100%の入学率を掲げている。今回貴校を見学して学校が賑やかで活気があると感じた。中国はより厳しく、知識を学ぶ雰囲気があって違う。貴校では生徒をどのように指導しているのか。
A: 部活や修学旅行は時間をとられることでもある。しかし、部活動に真摯に励み、受験にも成功した例を紹介したいと思う。野球部のキャプテンであった生徒は大学受験を控える高校 3 年生の途中まで部活動に力を入れていた。その生徒はバットを上手く打てなかったので、顧問の教員はたくさんバットを振らせ、技術の向上に取り組んだ。そして部活を引退してから、一生懸命に勉強に打ち込んだ。この生徒は後に「えんぴつはバットよりも軽い」と言って、バットをえんぴつに持ち替え、集中して勉強し、日本の最高峰の大学に入学した。これは部活動での取り組みが勉強に活きた例だと思う。これまで部活動に費やしていた時間を勉強にあてることで受験に成功した。部活動での指導も重要な要素であると思う。

2. 地域受入れプログラム（宮城県気仙沼市）

11 月 12 日（火）から 11 月 14 日（金）までの 3 日間、訪問団は宮城県気仙沼市教育委員会の受入れにより、気仙沼市内の小学校、中学校、特別支援学校、教育文化施設を訪問した。気仙沼市は宮城県北東部の太平洋沿岸部にあり、三陸海岸の一部である。三陸沖は寒流と暖流がぶつかるため、水産物が豊かで、世界三大漁場の一つと呼ばれている。気仙沼市の漁業、水産業は有名である。2011 年 3 月 11 日に起きた大地震により甚大な被害を受けたが、多くの恵みを与えてくれる自然環境とその恐ろしさの両面を受入れ、「海と生きる」をキャッチフレーズに新しいまちづくりを推進している。

気仙沼市教育委員会 小山 淳教育長による歓迎のあいさつ

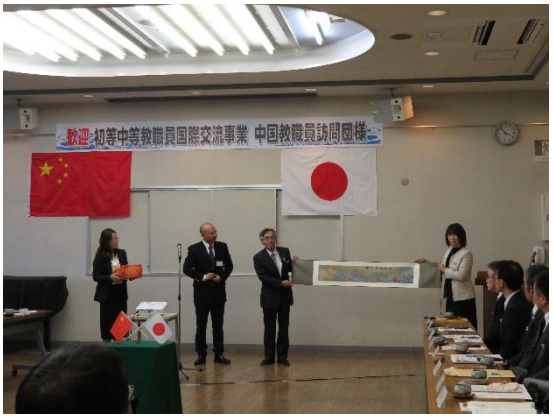
11 月 12 日（火）午後　気仙沼市教育委員会 オリエンテーション

気仙沼市教育委員会 学校教育課 副参事（指導主事） 小野寺裕史氏の司会により教育委員会側の出席者が紹介された。小山敦教育長の歓迎のあいさつにはじまり、同小野寺氏より気仙沼市の教育の特色である「気仙沼 ESD」に関する説明があった。

気仙沼市の教育理念は「海と緑のめぐみ豊かなふるさとを愛し、社会とのつながりの中で高い志を持ち、人間性豊かで創造力に富んだ、持続可能な社会の担い手を育む」こととし、気仙沼 ESD の中核をなしている。子どもたちに身に付けさせたい資質・能力を「Foresight（先を見渡す力）」「Insight（本質を見抜く力）」「Strategy（道を切り拓く力）」「Harmony（つなぐ力）」と定め、4 つの頭文字をつなげると「FISH」となり、気仙沼の代表的な食材と結びつけている。気仙沼市にある 14 の小学校、11 の中学校はすべてユネスコスクールであり、ユネスコ憲章に示された理念を学校現場で実践している。また、各学校では、「環境・生物多様性」「文化継承」「国際理解」「地域貢献」「防災・復興」の分野で、さまざまな ESD が展開されている。

教育委員会がある建物を入ると、教職員全員によって訪問団ひとりひとりに対するお出迎えがあり、入口正面には大きな花が生けてあった。また、階上へ向かう階段にはつるし飾りがほどこしてあり、中国教職員を歓迎する気持ちが建物全体から伝わってきた。

教育委員会の建物入り口の歓迎横断幕



日中の記念品交換による文化交流

Q&A（抜粋）

Q: 資質向上のための教職員研修について知りたい。教育委員会は教職員に対してどのような研修をしているのか。新人教職員や各教員に対する研修について教えてほしい。

A: 大きくわけて3つある。①各学校で先輩が後輩を教える OJT②市や県の教育委員会が実施する研修による③法律により初任者研修や採用から 5 年経過した教職員に対する研修。これらを通じて資質能力を向上させている。

Q: 担当教科ごとの研修はあるのか。

A: 学校で、教科、科目に分かれて普段から教え合い、高め合っている。一つの例であるが、近年学校が小さくなってきており、英語の先生方一人しかいない状況の場合は、他の学校の先生と連携・コミュニケーションをとりながら、能力を他構えている。

Q: 気仙沼市にある各学校は特色ある教育実践をしているが、学校によっては実践していないまたは成果のない場合はどのように対応するのか。また教育委員会が設ける基準によって評価されるのか。さらに、学校や生徒に対する評価は教育委員会が定めているのか。
A: 学校に対する評価については①学校が定めた目標に対する自己評価、②保護者による評価、③地域の人による評価があり、これらは公開することになっている。これらの評価に基づき、各学校長と教育長が面談し、教育長が改善点等含め、指導やアドバイスする。

Q: 特別支援学校の教職員の採用について知りたい。
A: 宮城県の教員として、小中学校または特別支援学校に分けて採用する。採用は分類されるが、採用後に人事交流がある。特別支援学校については、特別支援教育を大学で学んで、免許をもっている人が採用される。免許を持っていないが特別支援学校に勤務している教員は勉強して免許を取得する。

Q: 文部科学省で学校と地域の連携について聞いた。「気仙沼 ESD 円卓会議」での保護者や地域の方の割合はどのようになっているのか。
A: 学校教育に関わる連携においては地域の方が 8 割程度である。児童の安全面で関わるのは保護者が中心となる。学校の中に地域と連携するシステムができている。

Q: 徳育（日本の道徳にあたる）について、具体的な実施方法、どの教科でおこなうのか、また参考にできる取り組みを教えてほしい。
A: 小中学校では週 1 時間道徳の授業があり、礼儀・思いやり等を学ぶ。授業で学んだことを学校の活動で触れ、日常生活で活かされるようにしている。学習や生活を支える大切な教科と位置付けられている。

11 月 12 日（火）夕方 気仙沼市教育委員会 文化体験

気仙沼市教育委員会および茶道表千家教授で河北カルチャー講師の梶原宗恭氏により、教育委員会にある茶室にて、文化体験として茶道のお点前を見学するとともに、こころづくしのおもてなしで訪問団は歓迎された。茶室の入口には中国を象徴する菊と日本を象徴する桜の花が生けてあり、「日日是好日」の掛け軸がしつらえてあった。訪問団は日本のおもてなしを堪能した。

茶道具に興味を示す訪問団団長（左）

濃茶を味わう

11 月 13 日（水）午前 魚市場見学

水揚げされたメカジキとセリの場面を見学

地方卸売市場「気仙沼市魚市場」では、気仙沼市産業部水産課魚市場係 課長補佐兼魚市場係長 齋藤 英俊氏の案内により、既存施設（開放型）と今年 3 月に新設された施設（閉鎖型）を見学した。平成 30 年度の水揚げ量は全国 10 位、金額では全国 8 位を誇る。市場は約900mの長さがあり、高度衛生管理に対応した新施設を含め、日本で有数である。衛生管理を徹底しているため、セリの場面では 100kg前後あるメカジキを黒いパレットの上に乗せ、魚体が床面に触れることを防ぎ、汚染も防止している。また、新施設では排気ガスを排出しない電動フォークリフトを導入している。

魚種別の水揚高は、カツオが 22 年連続日本一で、このままいけば、23 年連続日本一になる見通しだそうだ。また、メカジキは日本の 6 割、サメは 7 割が気仙沼に揚がる。

2011 年 3 月 11 日の大地震により、地盤沈下が起きた。それにより、市は市場の海側の一部を 1m ほど底上げし、市場の中に段差が生じている箇所があった。震災以降は防災マニュアルがつくられ、500 人分の防災倉庫（備蓄庫）も設置された。

近年は水産業の振興のみならず、観光との融合を目指した取り組みを進めている。水産業の魅力を発信する施設や、魚食の普及を図るクッキングスタジオ、見学スペースを市場の中に設けている。また、市場の外にあるロケット型の柱には 7 色の LED をつけ、遊覧船とタイアップして夜景を楽しめるように工夫されている。

11 月7日（水）気仙沼市立鹿折小学校

訪問スケジュール

09:50	学校到着
10:05-10:30	歓迎セレモニー
10:40-11:25	授業参観 4 年生　算数（少人数指導、習熟度別 3 教室） 5 年生　海洋教育（総合的な学習の時間）
11:35-12:00	校内見学
12:00-13:00	給食交流
13:05-13:25	清掃活動
13:25-13:40	児童との自由交流
13:40-14:25	学校経営の説明
14:40-15:55	教育交流会
16:00-17:00	情報共有会

中国教職員による合唱

学校の特色、特記事項

2008 年にユネスコスクールに加盟した同校は、ESD を中核においた学校経営をしており、学校全体で実施するホールスクールアプローチを取り入れている。また、海洋教育のパイオニアスクールとして、体験的・探求的クロスカリキュラムを導入し、SDGs や気仙沼市の総合計画と教科を関連付けて、地域や世界と児童のつながりに意味や価値づけをしながら、自分なりの考えをもって行動できる資質を育んでいる。さらに、地域や異校種間との連携を密にし、さまざまな体験とフィールドワークを通じて、自尊感情（自分を大切に思える感情）、地尊感情（地域を大切に思える感情）、自己有用感（自分が人の役に立つ満足感）、チーム有用感（共同が人・地域の役に立つ満足感）を育み、批判的思考に基づき自己変容しながら、価値創造や課題解決に力を注いでいる。

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災では、火災により学区が全部消滅し、鹿折小学校があるところは学区でも被害が大きかった。その 3 日前に完成した新しい体育館は、津波により失われた。

Q&A（抜粋）

Q: 貴校の 10 の目標をどのように決めたのか。先生が決めたのか、それとも生徒と一緒に決めたのか。

A: 国連の 17 の SDGs の中から、教員が生徒の日常生活と関わるものを 10 個選んだ。基盤目標が Goal 17 と 4 で、重点目標が Goal 3、7、11、12、13、14、15、16 である。そして、169 のターゲットから 26 のターゲットを取り上げ、鹿折小学校の目標と関連付けている。

Q: クラス担任制と学校内部の体制を知りたい。

A: 日本では、基本的に小学校は一人の担任が学級を受け持つ、学級担任制である。1 クラス 40 人まで担任が 1 人、小学 1 年生は 35 人、中学 1 年生も 35 人、それ以外は基本として生徒 40 人に対して担任 1 人。ただ、これは日本の教育の大きな課題の1つで、文部科学省でも小学校でも教科担任制

を導入しようという方向で検討に入っています。例えば、英語（外国語）についてはそのように対応していく。 本校の英語は、3~4 年生が聞く、話すことを中心にした外国語「活動」、5~6年生は外国語「科」として読む、書くに広げた学習をしている。英語専門の非常勤教員（日本人）の先生が来て中心となり、学級担任とアメリカから来ているアシスタントランゲージティーチャー（ALT）と 三人体制で英語の指導をする。また、大事な教科である算数は、本校では習熟度によってクラスを 2~3 に分けて、「少人数式指導」という体制をとっている。さらに、特別支援教育でも、さまざまな配慮を必要とする子どもたちのために非常勤教員がいる。一斉指導が難しい子どもたちに通級指導（個別に指導する）体制を整えている。

Q: 1 人の生徒の学業、生活をどのような方針で評価するのか。
A: 各教科による評価基準による学業評価（数値化できるもの）、どのように積極的に授業に取り組んでいるかという態度面の評価、得た知識を自分で考えて深く理解しようとしているか、という点で評価し、その結果を通知表のかたちで保護者にみせている。数値化が難しい道徳、外国語活動，総合的な学習については数字ではなくて、担任が文書でその子の顕著なことを文章にして保護者に伝えている。

教育交流会の内容

気仙沼市立鹿折小学校校長淺野亮氏が全体的なファシリテーターとなり、中国と日本の教職員による教育交流会が進められた。まず、淺野氏より教育交流会のテーマ、話し合いの視点、話し合いの進め方が説明され、参加者全員と共有した。グループは 6 つに分かれ、中国と日本の教職員数名が混在する組み合わせで、鹿折小学校の教員が各グループのファシリテーターを務めた。

＜テーマ＞ 持続可能な社会の創り手を育む中国・日本の教育の方向性と可能性

＜話し合いの視点＞ 1. 学力向上に留まらず，学びに向かう力を伸ばすための教育とは？
2 学びの先にある，社会で生かせる資質能力をどう育てるか？
3 上の2つに対して，学校や教育行政はどう応えていけばよいか？

＜話し合いの進め方＞

◎ 児童生徒に育みたい力（コンピテンシー）について，①~③の視点からお互いの考えを伝え合う。
◎ 現在できている部分，できていない部分を話し合い，成果と課題を共有し合う。
◎ 各グループ代表が2分程度で発表し合う。

グループごとの話し合い

各グループの話し合いを全体に共有

【各グループが共有したこと】

<グループ 1>
・愛国心教育について
・学習力の向上について（学力の定義や概念、問題解決力を中心に）
・授業実践の方法

<グループ 2>
・中国での卓球の強さ
・教員の能力育成や教員に求める目標
・各児童生徒の状況に合わせた学習

<グループ3>
・担任や副担任の役割
・ESD教育

<グループ4>
・日本のPTAと中国の「家委会」（保護者委員会）について
・コミュニケーション能力
・特別支援教育

<グループ5>
・教員になった理由
・児童生徒の持続的な向上や発展

<グループ6>
・特別支援教育
・総合的な学習の時間
・子どもの学力

11 月 14 日（木）午前　宮城県立気仙沼支援学校

訪問スケジュール

08:30-09:30　学校概要説明と Q&A
09:35-10:00　校内見学
10:00-10:50　授業見学
10:50-11:20　見学授業に関する質疑応答

学校概要の説明を受けている様子

学校の特色、特記事項

1984 年に宮城県立気仙沼養護学校として開設され、2009 年に宮城県立気仙沼支援学校と校名が変わった。気仙沼市と南三陸町を包括する雄一の知的障害の特別支援学校である。また、地域の幼稚園・保育所、小中高等学校における特別支援教育のセンター的役割や機能も担っている。小学部から高等部に 59 名の児童生徒が在籍しており、男女比はおよそ 3:1 である。児童生徒はスクールバスや公共交通機関、保護者の送迎によって通学している。通学が困難な柔道重複障害の児童生徒には、担任が自宅を訪問し、指導している。学校と地域の交流は盛んで、近隣の小中学校と交流学習をするほか、学校周辺の自治会との交流や気仙沼市の植栽活動に取り組んでいる。加えて、地元の陶芸家による陶芸教室や地域に伝わる伝統舞を学校祭で演じることにより、地域とのつながりを大切にしている。学校の教育目標は「児童生徒一人一人が夢や志をもちながら、地域社会の中で自分らしく、たくましく生きていくための力を身に付けられるようにする」。児童生徒の自立と社会参加を目指し、ひとりひとりの教育的ニーズに応じた授業実践をしている。

Q&A（抜粋）

Q：学校卒業後、貴重に就職するために学校はどのように生徒にあった企業をみつけるのか。
A：ひとりひとり実態の違う生徒を社会とつなげることは一番難しいことである。生徒の能力を見極め、企業の理解を促すことに力を注いでいる。例えば工場で働く場合、1 人の仕事の一部を切り出して、複数人から集め、1 人分の仕事を作り出してはどうか？と学校が企業に提案することをしている。理解ある支援者をみつけることに心を配っている。

Q：保護者への教育はあるか。学校と家庭（保護者）が連携している例を教えてほしい。
A：学校教職員と保護者が近隣の施設を訪れ、一緒に学ぶ機会をつくっている。例えば、近隣の方々（保護者を含め）とてんかんの勉強会を開いている。また、教員と保護者が年 2 回程度面談をし、保護者の疑問や求めることを情報提供したり、通信の方法で文献紹介等している。

Q：教職員は何名いるのか。
A：教職員の人数は 67 名で、指導に当たる教員は 60 名である。本校は知的障害の児童生徒が通学

している。単一障害と重複障害の学級がある。知的障害に加え、肢体不自由や視覚・聴覚障害、病弱である場合を重複障害と言う。知的障害をもちながら、自閉症を持っているお子さんは児童生徒の 50%である。

Q：障がい者に対する法律はあるか。

A：憲法に基づく教育基本法があり、これにより学校教育が実施されている。障がい者に対する法律はあるが、障がい者の教育に関する特別な法律はない。

Q：特別支援教育・障がい者教育に対して、学校の諸経費は足りているか。

A：経費は、国と県からによるものである。給食や教材の一部については、保護者の負担が必要であるが、これに対して国が支援する制度がある。

Q：学校で教育とリハビリテーションを実施するか。

A：特別支援学校は教育機関であり、医療機関ではないので、病院のようにリハビリはできない。ただし、病院に通うお子さんがいるので、そのような子どものニーズを教育としてどのように応えられるかを検討し、実施している。

Q：学校として難しいと感じているところ、教頭先生が困っていることを教えてほしい。

A：一つ目は障がいをもつお子さんの実態がさまざまであるので、ひとりひとりにあった対応をすることは大変である。もう一つは、この地域にある唯一の特別支援学校であるため、この地域の教職員含めて特別支援教育についての専門性、指導力の向上については難しさを感じている。

11 月 13 日（木）午後 気仙沼市立階上中学校

訪問スケジュール

12:00	訪問団到着
12:05-12:20	歓迎のつどい「エール」
12:20-13:00	給食
13:00-13:15	休憩
13:20-14:10	授業見学 防災学習（総合的な学習の時間）
14:20-15:20	学校概要説明、質疑応答
15:30	訪問団出発

中国の旗をもった全校生徒に歓迎を受ける

学校の特色、特記事項

1947 年に開校し、72 年の歴史がある。少子化の影響で生徒数が減少傾向にある。学校の教育目標は「自ら学び、互いに協力してやり抜く生徒の育成」であり、「自分の居場所があり、明日も行きたくなる学校」を目指してバランスの良い知育、徳育、体育を実践している。学校の伝統は先輩から後輩に代々引き継がれている「あいさつ」「エール」「防災学習」。

伝統の一つである「防災学習」は、2003 年の宮城県沖地震、2004 年のスマトラ大地震をきっかけに、海の近くにある学校として自分の命を自分で守るために 2005 年から始まった。その後、2011 年 3 月 11 日に起こった東日本大震災により、学区で多くの犠牲者が出たため、これまで学校で取り組んでいた防災を地域と連携して実施していくことにした。総合防災訓練への参加のみならず、体験的・探求的な学習を通じて、実践的な救急救命や小学生に対する防災の啓発活動をしている。さまざまな活動を通じて学んだ成果は、保護者や地域の人びと、高等学校や防災に関わる人びとに広く発表している。さらに、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館とも連携し、生徒が語り部となって震災からの教訓や学びを伝えている。

Q&A（抜粋）

Q:高校の進学のプレッシャーに関して、先生はどのように対応しているか。

A:高校の進学は 100%。生徒が希望する学校に進学できるように指導している。点数によって「この学校に行ける」「この学校に行けない」という指導はしない。生徒が将来したいことに応じて指導する。希望する学校への進学にはもちろん学力が必要である。生徒に学力を身に付けさせるのに一番大事なことは教員の指導力だ。そのため、校内外での研修に教員を積極的に参加するように促している。しかし、教員の指導力は 1～2 日で簡単に身に付かない。先生が本気になることは大切である。職員会議では、校長として、教員には No.1 の先生になるよう伝えている。わたしも指導力を身に付けるよう精進する。

Q:生徒が塾に行くことに関して、学校はどのような方針であるか。積極的に勧めるのか、あるいは反対するのか。そして、貴校の先生は、校外で生徒を教えることがあるかどうかしりたい。

A:生徒は学習・ピアノ・書道・・・に関する塾に通っているが、どのくらいの割合であるかはわからない。塾

に行かせるかどうかは家庭が決めることであり、学校が勧めたり、反対したりすることを言わない。公立の教員は学校外で仕事ができない。

Q:三大伝統の中に、あいさつとエールがあったが、あいさつの具体的なことを知りたい。また、エールを伝統としている目的はなにか。
A:朝、会うときには「おはようございます」。昼は「こんにちは」。帰るときは「さようなら」。これらを、相手の目を見て、大きな声で笑顔で話す。これが本校の「あいさつ」である。エールは自分たちの気持ちを高めるために行う。スポーツや芸術の大会で本気でやる。今日、本校のエールをご覧になって、たぶん何を言っているのか分からないと思うが、気持ちだけ伝わったと思う。エールの内容は 20 年間の生徒会のテーマを発声している。話すことばは毎年長くなるので、さらに 30 年経ったら覚えられないかもしれないし、腰が耐えられないかもしれない。

Q:（気仙沼市立階上中学校校長菅原定志氏からの質問）中国の学校で外国語は何語を勉強しているのか。例えば、英語だったら、どのくらい話せるようになるのか。
A1:私（A-07 張静）の勤務校は上海の公立の外国語小学校で、生徒数は 3000 人、キャンパスは 2 つある。外国語学校であっても、母語の中国語を学ぶ。外国語として基本は英語である。その他の外国語はクラブ活動で学ぶ。この活動でドイツ語や日本語などが学べる。勤務校は国際的な視野、国際コミュニュケーション能力を重視しているため、生徒の会話能力がとても高い。一週間の英語の時間は 5 時間あり、2 時間はネイティブの先生が教える。外国人の先生の授業の一つは science を英語で教えている。これらを小学 1 年生から実施している。毎年、国際交流もしており、具体的には、サマースクールの形で、アメリカとオーストラリアに訪問するプログラムと中国国内で研修するグループがある。小学 3 年生以上の生徒が参加できます。実際に母語が英語の子どもたちとの日常会話のやり取りは問題ないです。
A2: 中学校の状況として、私（A-05 朱彤吉）の勤務する甘泉外国語中学校（6 年生から、高校三年生まで）では、第一外国語として、英語のほかに、日本語、それからドイツ語、フランス語、スペイン語ー五つの中から選べる。その他に、第二外国語として、韓国語、タイ語、イタリア語、ロシア語を選択することが可能である。また、第一外国語としての言葉を該当する国で、少なくとも 2 つの学校と交換留学や国際交流をしている。

11 月 14 日（木）夕方 東日本大震災遺構・伝承館

2011 年 3 月 11 日発生の東日本大震災による大津波とその後の大規模な火災により、気仙沼市は、死者 1,152 人（震災関連死を含む。）、行方不明者 214 人の犠牲者がでた。気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館は、震災当日まで宮城県県立気仙沼向洋高校の校舎として利用されていた建物に震災伝承館を加えた施設である。津波で最上階の4階まで浸水した南校舎の1、3階と4階の一部、屋上、北校舎の一部を公開している。総合実習棟、生徒会館、屋内運動場は外部のみ公開している。校舎内に流れ込んだ乗用車、車が折り重なる渡り廊下などを見学することができる。隣接する伝承館（鉄筋平屋、約1295平方メートル）は、大型スクリーンで津波の脅威を伝える映像シアター、語り部や映像で被災者の思いに触れる講話室、防災教育に活用する体験交流ホールなどを備えている。将来にわたり震災の記憶と教訓を伝え、警鐘を鳴らし続ける「目に見える証」として活用し、気仙沼市が目指す「津波死ゼロのまちづくり」に寄与することを目的としている（気仙沼市東日本大震災遺構伝承館ホームページ：http://www.kesennuma-memorial.jp/より）。

見学当日、伝承館の館長佐藤克美氏より伝承館に関する説明を受けたあと、当時の様子を伝える映像を視聴した。そして、気仙沼市立階上中学校の生徒が「語り部」として、館内外を案内しながら、訪問団に震災当時の状況やその被害について伝えた。見学した箇所は、「地震・津波の脅威と爪痕」がわかる展示室 A、旧南校舎 1 階「破壊された校舎」、3 階「津波で流されてきた車」、4 階「津波到達地点」、屋外の「壊れた壁」「折り重なった車」、旧北校舎 1 階にある震災前の学校の様子、「救助と行方不明者の捜索」「避難所の様子」「応急仮設住宅での生活」のある展示室 B、展示コーナー。見学した時間は午前中より気温が下がり、凍えるような海風を感じる中、生徒さんは寒さに負けず、最後まで立派に案内役を務めた。

生徒の案内の後、大地震が発生した次の日に階上中学校の体育館で行われた卒業式の様子と卒業生代表の梶原裕太君が答辞を映像で視聴した。自然の脅威にさらされた人間の無力感、悔しさ、やりきれなさをことばに乗せ、後輩に対するメッセージ、学校の先生や両親、家族に対する感謝に加えて、これから待ちゆく生活や状況に立ち向かっていく力強さを伝えていた。

佐藤館長の説明を受ける

階上中学校の生徒の案内より見学

訪問団は気仙沼市でのプログラムで感じた気持ちを付箋に書いて、伝承館を後にした。

1．がんばれ。早く回復しますようにお祈りします。

2．災難が人類に起こりませんように！日本が益々よく発展し、令和元年に平和で繁盛でありますようにお祈りします！
中国：王燚 2019.11.14

3．防災教育は小さい頃から、確実に行います！強くなれ！

4．自然災害は無情ですが、人間世界には愛情があります。
趙鵬麒 2019.11.14

5．災害は無情ですが、人間は温かい感情があります。

6．自然を畏敬し、海と共生します。朱彤吉 2019 中国教職員日本訪問団 2019.11.14

7．自然災害の前に、人類はちっぽけです！しかし、我々全人類が共に努力し、助け合い、建設し、生きることさえすれば、希望はいつも存在します！李富保 2019.11.14

8．大きな災難がたくさんの人々またはその家族の命を奪ったことを、気の毒に思います。私は彼らのために祈り、日本人と中国人に災難が起きないように願います。

9．「3.11」のドキュメンタリーを観て、人生の無常を感じました。「平凡な生活は実は最高の生活！」みなさんに平安がありますように！2019.11.14

10．強くなれ！ がんばれ！毎日を大切に！
From 陳肖前 19/11.14

11．子どもたちが今回の経験を通じてよりたくましくなることを願います。

12．亡くなった者は安らかに眠り、生き残った者はたくましくなります。意識を高め、未然に災害を防ぐのです。2019.11.14
厳熙

13．気仙沼の人々が益々よくなることをお祈りします！
2019.11.14

14．強くなれ！あなたならできます。

15．気仙沼市民が災害に勝ち、生活がより幸せになりますようにお祈りします！2019.11

16．強くなれ。

17．平安は幸せです！

18．自然災害は無情ですが、人間は愛情があります。気仙沼のみんな、がんばれ！がんばれ！！がんばれ！！！2019.11.14

19．人生とはこんなものです。がんばれ！がんばれ！

20．自然と共生し、運命共同体を構築します。

21．平安が常に伴い、幸せが常に存在しますように願います。

22．感動したと同時に、安全教育の重要性を認識しました。安全でありながら危険を考えるという意識を持って、次世代のために教訓を学ぶ必要があります。中国に帰ってから安全教育に注目します。

23．訓練を強化し、死傷者を減らします。がんばれ！がんばれ！

24．災難は無情ですが、人間は愛情があります！強くなれ、希望はいつもあります。2019.11.14

25．命がやまない、未来は勝つ。張彩萍：上海 2019.11.14

11 月 15 日（金）午後 報告会・閉会式

プログラム最終日の 11 月15日、ハートンホテル東品川にて報告会および閉会式が行われた。出席者は、文部科学省からは大臣官房国際課国際戦略企画室長・三輪善英氏、総合教育政策局調査企画課外国調査第二係長・新井 聡氏、大臣官房国際課企画調査係・小口眞緒氏が出席し、中華人民共和国大使館からは三等書記官・劉維氏が出席したほか、今回訪問した気仙沼市からは気仙沼市教育委員会学校教育課副参事（指導主事）の小野寺裕史氏、そして気仙沼市立鹿折小学校の教諭・千葉順子氏が出席した。

報告会では、訪問団の秘書長である張輝武氏から1週間のプログラムについて、見た事・聞いた事、感じた事、展望という流れで報告が行われた。感じた事として、日本の教育は科学的で実用的な教育であるという点を挙げ、よく整備された制度や管理体制、知・徳・体の全人的な教育が行われている点、教職員が専門的で熱心な点、探求心を育てる教授法、学校と地域との連携等が中国の参考になったと述べた。最後に、今後の展望として、このようなプログラムは教育の交流となるだけでなく、未来の友好的な子供の育成にも繋がっているため重要であり、ぜひ日本の方々にも変わりゆく中国の教育を見ていただき、交流と相互理解を深めて欲しいとの言葉で締めくくられた。

張氏による報告の後、関係者から感想やコメントが述べられた。今回の訪問校である気仙沼市立鹿折小学校の千葉氏からは、まず東日本大震災の際にいただいた中国からの支援に対してお礼の言葉があり、今回の訪問に当たっては中国の生徒の保護者に中国の歌を教えてもらって生徒達と練習して披露したなど、地域ぐるみで訪問準備が行われたことが語られた。 また、日中関係では厳しい時期もあるが、今回のような交流で気持ちが繋がると思ったこと、そして子どもたちもこれから中国のニュースを見るたびに親しみを持って見るだろう、というコメントと共に、学校訪問を通して自身も様々なことを学び、中国の先生の熱心な姿勢に感銘を受け、貴重な経験をさせて頂いたことに感謝しますと述べた。

また、文部科学省の新井氏からもコメントがあった。訪問団の報告を聞いて、中国の先生の目を通して新たに日本の教育を知るという貴重な経験ができ感謝しているということと、報告の中で、①全人的な教育、②教育のプロ意識の高さ、③良好な社会における教育リソースの利用、について中国の先生方が着目している点に特に感銘を受けたと述べた。また、中国でも日本と同様に全人的な教育を行おうとしていることについて触れ、どうやっていくかを相互交流の中で共に考え、日中交流で情報共有を行うことが重要だと述べた。同じく文部科学省の小口氏からは、交流は教育の質を高めるためにも重要であり、日本教職員が海外を訪問する派遣プログラムに自身も参加した経験について触れ、プログラム終了後も参加者の交流が続いており、今後も続くことを願っているとのコメントがあった。

続いて行われた閉会式では、初めに文部科学省の三輪氏、中華人民共和国大使館の劉氏、訪問団団長の兪氏からそれぞれ挨拶が述べられた。三輪氏は、これまでのプログラムがきっかけで様々な交流や実践が広がっている点について触れ、今回のプログラムでも相互理解が深まり、学校間交流に繋がることを期待していると述べた。そして、訪問団の来日は日本の教師や生徒にとっても、異なる文化や異なる視点の教育に触れることができるまたとない貴重な機会であったとして感謝の意を述べた。

中華人民共和国大使館の劉氏は、日本の教職員が中国政府により招へいを受け中国を訪問する「中国派遣プログラム」の今年の報告会にも参加したことについて触れ、報告会に参加することは大変勉強になったし、今日はまた学びに来たと述べた。まず、本プログラムに関して、これまでの相互交流プログラムへの参加者が2千人に上ることに触れ、中日関係には起伏があったが、プログラムが続いたことについて、数だけでなく継続性という点でも素晴らしく、意義のあるプログラムであると述べた。そして、中日間の国民感情は一番良かった時ほどにはまだ回復していないので、教員交流を通じて日中間の架け橋

になり、国民感情の回復を目指したいと述べた。交流では実際に現地に行って自分の目で見てコミュニケーションを行うことが重要であり、実際に行き来して連絡を取り続けることが大事だと語り、実際に行って体験したことをぜひ大使館にも報告して欲しいし、もし学校間交流の希望などがあれば大使館が力になるとの言葉もあった。訪問団団長の兪氏からも、国民感情の誤解を解くためには実際に訪問し合うことが重要であり、教育者は架け橋となって活躍し、中日友好についても責任を持つ必要性がある。中国と日本で共に手を取り合い前進していきたいと述べた。

プログラムの報告をする副団長の張氏

挨拶を述べる中華人民共和国大使館の劉氏

3. 参加者アンケート

参加者アンケート

＜目的＞

2019 年度初等中等教職員国際交流事業「中国教職員招へいプログラム」に参加した中国教職員から本プログラムに対する意見を聞き、今後のプログラム計画・運営の参考にするため、実施したものである。

＜アンケート調査＞

〇調査時期：2019 年 11 月

〇調査対象 2019 年度初等中等教職員国際交流事業「中国教職員招へいプログラム」に参加した中国教職員 25 人

〇調査方法：2019 年 11 月 10 日（日）のオリエンテーション時にアンケート用紙を対象者 25 人に配付し、11 月 16 日（土）ホテル出発前に参加者 25 人より回収した。

〇回収結果：配付した 25 人全員から回収した（回収率 100%）

＜調査内容＞

〇プログラムの満足度

〇プログラムへの参加目的

〇プログラムを通じた成果

〇プログラムにおける有意義な活動

〇日本の教育に対する関心・理解の変化

〇日本の全体的な印象の変化

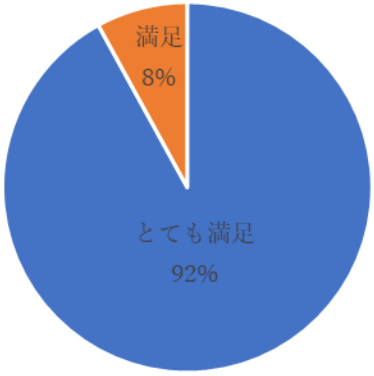
〇帰国後の活動・交流

〇今後の継続的な交流

〇その他（改善点や意見・要望等）

◎掲載にあたり、理由・意見等の記述部分はコンピューターで無作為に 5 人分を抽出した。（原文は中国語）

◆質問 1.全体的な満足度
（アンケート有効数:25）



A-6 厳熙（とても満足）
到着してすぐに収穫があった。学校の教育から、科目設定、生徒の生涯計画など詳細に見学し、学校側の丁寧な対応、愛情が感じられ、真に一人一人の生徒が自分らしく成長できるように取り組んでいることが分かる。

A-8 張彩萍（とても満足）
1.すべての日程は合理的で順調だった。
2.スタッフ全員、責任感を持っている
3.訪問先が適切だった。
4.報告会の内容は全体的、レベルが高く、深みがあって学びが多かった。

A-9 張勤（とても満足）
1.プログラム全体の流れは秩序よくできた。日本側が準備を整えていたため、今回の訪問活動は順調で楽しく終えることができた
2.意味があった。旅行と違って、日本教育の最前線に立ち入って、普段なかなかできない体験をした。
3.誠意と愛情にあふれていた。文部科学省をはじめ、教育委員会、学校を含む皆さんより盛大な歓迎をいただき、充分に交流ができて、和やかな雰囲気だった。

A-17 趙学成（とても満足）
スケジュールはまとまっていて合理的であり、交流内容の選択はねらいがはっきりしています。双方は基礎教育の範疇内で深く議論と交流し、また相手のやり方を学びあい参考にしました。

A-23 黄興祥（とても満足）
1. 細部まで丁寧に企画されています。
2. 双方の交流によって、向上していきます。。

◆質問 2. 参加目的
（アンケート有効数：25）

A-1 兪偉躍
基礎教育交流をより密にし、お互いに学ぶこと。

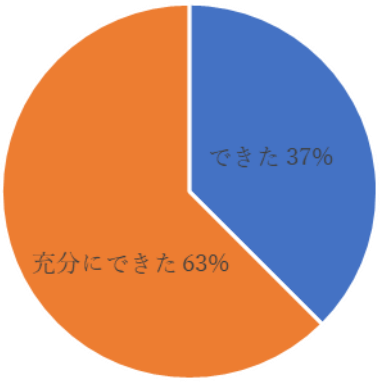
A-2 張輝武
1．日本人や日本文化を体験する
2．日本の基礎教育を学ぶ
3．友人を作る

A-5 朱彤吉
1．日中友好関係の継続のため。我が校（上海市甘泉外国語中学校）は日本の中学校との交流を長く継続してきた。今回のイベントを通じてさらに継続していきたと考えている。
2．理解を深めるため。自ら見て聞いて真の日本教育実態を知ることで、日中双方の理解を深めたい。
3．もっと発展させる。長所を取り入れあい、短所を補い合い、持続的な発展を促す。

A-11 王磊
日中の相互理解を促進し、友好関係を強め、日本の初等教育の現状を了解し考察すること。

A-25 趙鵬麒
交流、学習、友好関係を深めること。

◆質問 3. 目的は達成できたか
（アンケート有効数：24）



A-6 厳熙（充分にできた）
各訪問校は ESD をコンセプトにして運営していることが分かった。ESD を 1 つの科目として開設するのでなく、ESD の理念を各科目の教育に徹底している。

A-12 陳芸（できた）
日本の基礎教育に対する理解をさらに深め、生徒指導、教員の養成、防災教育などの先進的な実践について学び、日中の友好関係が増した。

A-15 王燚（充分にできた）
1、友好を伝え、日中両国の友好の種をまくことができた。
2、日本のトイレの清潔さがどのように形成されたのかを身をもって体験し勉強して、得たものがたくさんあった。

A-17 趙学成（できた）
双方の教育行政職員、学校校長と教師は、友好訪問・交流・討論を通じて、みな学びあうという目的を達成した。

A-22 冉紅艶（充分にできた）
すでに 2 の中で述べた目的を達成しました。どの訪問や交流においても、先生たちの質問や発言はとても積極的だった。

◆質問 4.当初の目的以外、このプログラムから得られたものがあればお書きください
（アンケート有効数：24）

A-4 張勤
今回の訪問団体には、自分の地元の教員だけでなく、他の都市の教員もいる。また雲南省の教職員、校長先生もいる。そのため、各区や町間だけでなく、県や市間も充分に交流ができた。それから、防災対策に関してもより分かるようになった。

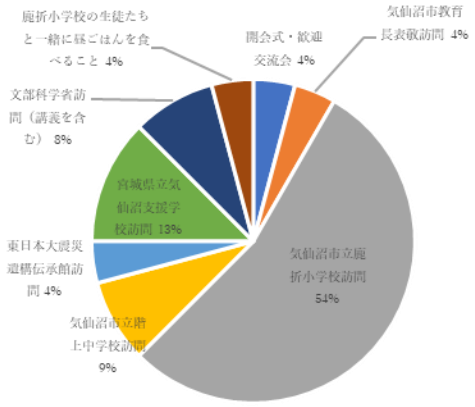
A-11 王磊
意外な収穫があった。気仙沼市立階上中学校の防災教育活動が印象深かった。一つ目は授業で生徒に自主的に防災内容の設計をみせてもらったこと。二つ目は社会資源を利用し、大震災遺構伝承館で生徒にガイドになってもらったこと。これらのことを中国でもつたえ、さらなる学びに値する。

A-16 易新艶
日本は特にルールを重視し、時間を守る国だった。児童生徒の教育は実践体験を重視し、小さい頃から子どもの養成教育を重視している。

A-22 冉紅艶
ほかに得たものがある。ユネスコ ESD プログラムについてより深く知った。

A-24 李富保
ある。児童生徒のよい行いと習慣の養成は、「保護者」から、「小さい頃」から始めることだ。

◆質問 5-1.最も有意義な活動は何であったか
（アンケート有効数：24）



A-4 張瑾（宮城県気仙沼支援学校訪問）
特別支援学校は多くの方面から地元の生徒に対して支援指導を行い、家庭教育を重視する。特別指導を行う教員たちの専門性に感動した

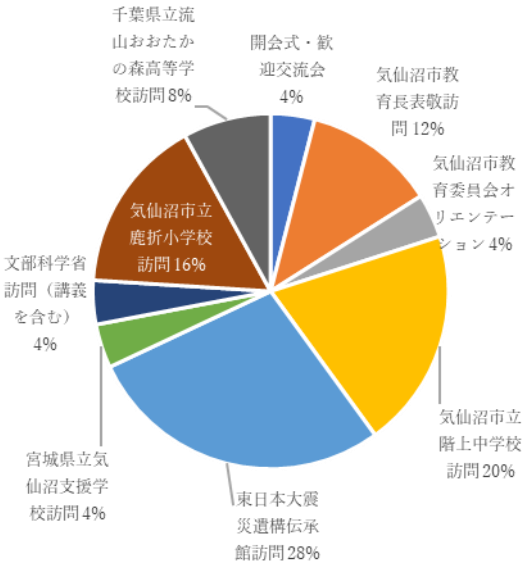
A-12 陳芸（気仙沼市立鹿折小学校）
児童生徒の習慣やひとりひとり資質養成に尊敬した。

A-14 黄城（気仙沼市立鹿折小学校訪問）
生徒と充分に触れ、生徒の生活と学習を知った。

A-19 馬義三（気仙沼市立鹿折小学校訪問）
交流の仕方はとてもよく工夫されており、教職員同士の交流があり、教職員と児童生徒との交流もあった。児童生徒と一緒に昼食をとり、彼らのさまざまな生活を体験し、交流しました。児童生徒による掃除やごみ分別等から、私はたくさん勉強になった。

A-22 冉紅艶（気仙沼市立鹿折小学校訪問）
日本教職員と児童生徒の熱意を感じた。小学校段階の養成教育が非常によくできており、我々にとって勉強と参考に値する。

◆質問 5-2. 二番目に有意義な活動は何であったか
（アンケート有効数：25）



A-2 張輝武（気仙沼市教育長表敬訪問）
教育長は非常に親切で深く印象に残り、厚い友情を育んだ。

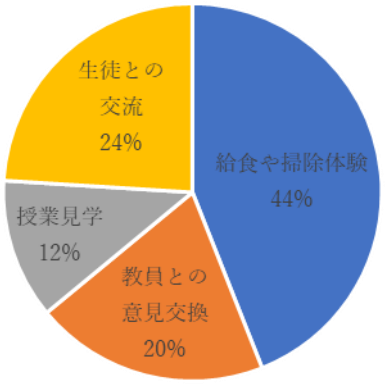
A-6 厳熙（気仙沼市教育長表敬訪問）
気仙沼市の教育振興政策は非常に洗練されてわかりやすかった。気仙沼市が地域特有の資源と環境を利用して学習機会を創出することの重要性を知り、子どもたちにいかに生涯にわたって多様な学習と発達の機会を提供し、それに対する努力を理解した。

A-7 張静（気仙沼市教育委員会オリエンテーション）
親切かつ行き届いた歓迎会をいただいた。友好が溢れた雰囲気だった。

A-16 易新艶（気仙沼市立階上中学校訪問）
総合実践の授業に参加し、学校がこの授業を設置した意義と目的を学んだし、教職員の取り組み、気仙沼の人々の困難と意地をも感じました。

A-20 張永林（気仙沼市立鹿折小学校訪問）
鹿折小学校の生徒と一緒に食事をし、話し合い、掃除して、子どもの心と生活体験を深く体験した。

◆質問 6. 特に「学校訪問」について、最も有意義な活動は何であったか
（アンケート有効数：25）



A-2 張輝武（給食や掃除体験）
見識が広がった。日本は小中生徒に対して、習慣づけに関する教育はとても良くできている。

A-8 張彩萍（教職員との意見交換）
日中の教職員は教育に対する理解に相違点がそれぞれあった。交流会では、質疑応答を通じて、日中の教育事情に対する理解を深めることに良い影響があった。

A-11 王磊（給食や掃除体験）
日常のディテールに着目し、児童生徒の実践能力と生きる力を培います。行動の重要性を理解してこそ、他人の成果を尊重することができる。日本人がもつ他に迷惑をかけないという文化的価値観が徹底されていた。

A-13 李新龍（教職員との意見交換）
1．自分が準備した質問は全部回答を得た。
2．日本側に中国教育の状況を紹介し、中国人の友好と善意を伝えた

A-16 易新艶（給食や掃除体験）
学校における子どもへの生活教育を知り、私自身の教育管理に関して考えさせられた。

◆質問 7.プログラムの中で、他にどのような活動があったらよいか
（アンケート有効数：16）

A-2 張輝武
日本の保護者、一般の方との交流会を加えてほしい。教育は保護者、社会と大きく関係していると思う。

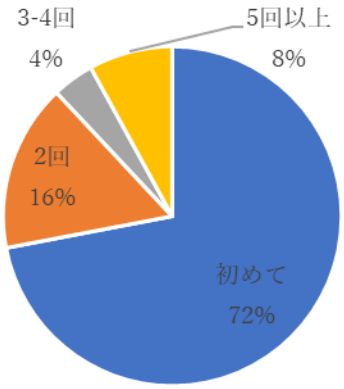
A-5 朱彤吉
事前に同じ科目を担当している日中教員同士をマッチングすること。そうして、日中教員が共に授業を行って、日本の生徒たちに異なる体験をさせて、より深い交流を実現する。

A-8 張彩萍
全ての訪問校で授業の様子を見学してもよいかと思う。

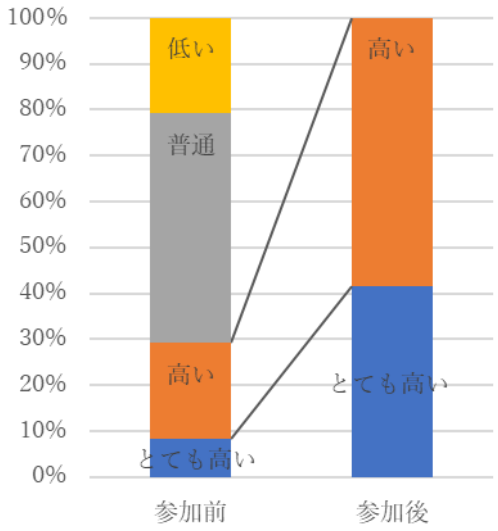
A-14 黄城
もし可能であれば、教学討論の機会を設け、日本教職員の授業をデザインする発想と方法を、中国の教職員に知ってもらってもいいと思う。

A-19 馬義三
生徒の保護者を訪問すること（生徒の在宅の状況、親の子どもに対する要求、どのように子どもを教育するのか、どのような措置をとるのかを知る）。

◆質問 8.来日するのは今回で何回目ですか。
（アンケート有効数：25）



◆質問 9. 日本の教育全般への関心と理解度の変化
（アンケート有効数：24）



A-3 宋懿琛（高い→とても高い）
自ら体験することは書籍を通じるのよりずっとよかった。「人は本から得た知識以外に、自らの足で各地を旅行し、視野を広げ、見聞を広めなければいけない」ということわざの通り、対面的な交流は心から日本教育への理解を促す。

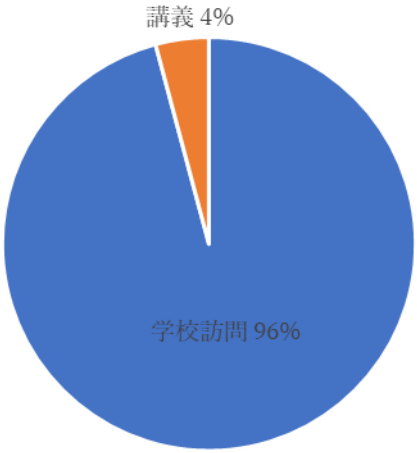
A-9 張勤（普通→高い）
日本教育の組織と仕組みに対してより理解を深めた。

A-15 王燚（普通→高い）
1．人に迷惑をかけないということを真に理解した。
2．衛生管理がどのように行われているのかを真に体験した。

A-23 黄興祥（高い→とても高い）
日本の教育は細部にわたって教育と実践応用の教育に非常に重点をおいています。

A-24 李富保（高い→とても高い）
社会公民の全体意識を培うことは、非常に参考に値する。

◆質問 10. 日本の教育の理解に役立った項目
（アンケート有効数：24）



A-8 張彩萍（学校訪問）
報告会と講座は全体的で、学校訪問は日本の教育を理解するためにより有意義だった。学校運営を細部まで拝見でき、教員の責任ある指導を感じたりして、直に学ぶことができた。

A-12 陳芸（学校訪問）
身をもって体験することは、理解と印象を深めることに役立ちます。直観的で可視的と感じました。

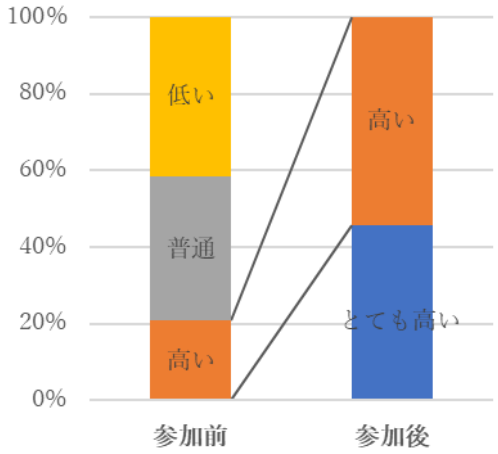
A-16 易新艷 （学校訪問）
教師と生徒に接し、私の理論上の理解をより具体的、豊富かつ鮮明にし、日本の教育に対する理解が深まった。

A-19 馬義三（学校訪問）
学校訪問で教師と生徒と直接交流することができ、学校管理、学校文化、学校独自の活動や学校の経営特色に直接触れることができた。教育管理者の一人として、同業者と学校が直接交流し、採長補短することは、より有益なのかもしれない。

A-23 黄興祥（学校訪問）
学校訪問を通じて、学校の活動と実践は教育大綱に緊密に繋がり、教育目標は個性的であった。

◆質問 11.プログラム参加前と後の、国際理解教育や ESD（持続可能な開発のための教育）への関心や理解度について

（アンケート有効数：24）



A-1 兪偉躍（高い→とても高い）
気仙沼市が推進するESDの取組に関して理解を深めた。

A-10 陳肖前（低い→高い）
ESD の具体的な内容を理解し、学校での ESD 実施概況を理解した。

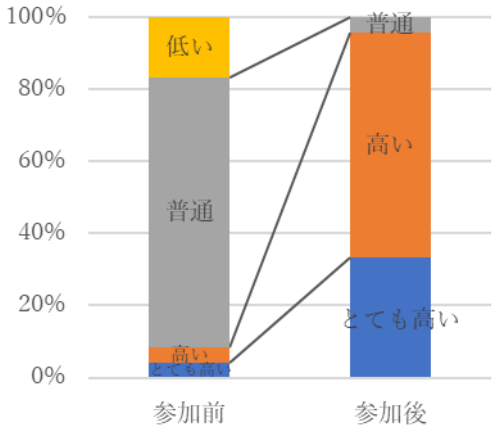
A-12 陳芸（低い→高い）
1. 国際理解教育は世界の潮流である。
2. ESD は未来の発展に重要。
3. 日本文化は国際理解教育と ESD を取り入れている（国際&ローカル）。

A-24 李富保（普通→とても高い）
1. ESDに対して初歩的な理解を得て、今後全面的にESDを知ることに非常に役立った。
2. 持続可能な教育の理念は国境がなく、共通の目標は社会にとって有用な人を育てること。
3. 子どもが夢を持ってこそ、国民や民族に希望があり、国家は栄える。

A-25 趙鵬麒（普通→とても高い）
同意し賞賛する。

◆質問 12.プログラム参加前と後の日本に関する理解度について

（アンケート有効数：24）



A-2 張輝武（普通→高い）
一週間の交流・訪問を通じて、日本に対する印象を深めた。特にルールを守ることに関して。

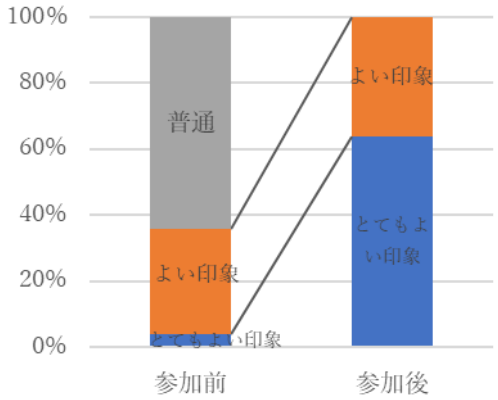
A-5 朱彤吉（低い→高い）
今まではマスコミを通じて日本について知った。今回は自ら日本に来て、日本の教育を学んで、日本に対する認識が広がった。

A-9 張勤（普通→高い）
日本人はきちんとルールを守っている。時間厳守、きっちりと流れに従う、どんなことに対して丁寧に対応する。

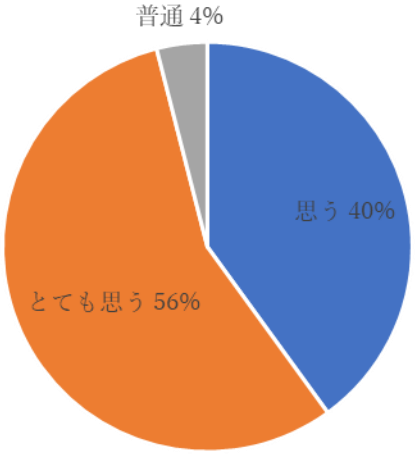
A-14 黄城（普通→高い）
映画やテレビの中の日本は実際の日本と大きなギャップがあり、特に ACCU のような機構とたくさんの友好的な日本教職員と児童生徒がいることを大変嬉しく思う。

A-15 王燚（低い→普通）
夢の中の日本から今日現実の日本へ、規範意識が強いことを理解した。

◆質問 13. 今回の活動を通して、日本の全体的な印象（日本人、文化と風習）はどのように変化しましたか
（アンケート有効数：25）



◆質問 14. 日本の教育と文化について、今後更に学びたいと思いますか
（アンケート有効数：25）



A-2 張輝武（良い印象→とても良い印象）
きれい、礼儀正しい。

A-9 張勤（良い印象→良い印象）
日本はいつも環境がきれい。日本人の親切により、気分もさわやかになる。

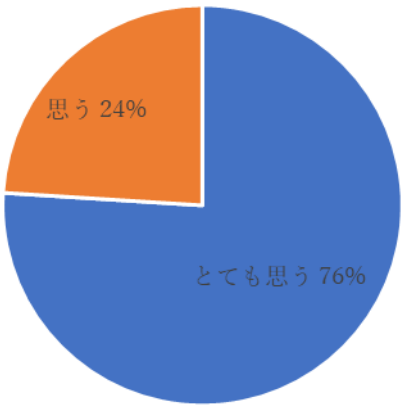
A-12 陳芸（普通→とても良い印象）
1．日本の教職員と児童生徒は中国に対して友好で親切で、中国と協力や交流することに賛成する。時間とルールを守る。
2．日本文化が独特。

A-13 李新龍（普通→良い印象）
1．日本人の仕事に対する真面目な姿勢とディテールへのこだわりが深く印象に残った。
2．日本の会議の文化や食卓文化などを体験し、我々にとって勉強と参考に値することがたくさんあった。

A-16 易新艶（普通→良い印象）
全体の印象が理論上、情報上の認識から、具体的、感性的な認識に変わり、本当に日本の文化と慣習に触れた。

◆質問 15.帰国後、あなたは今回参加したプログラムの体験を生徒や同僚に報告・共有しようと思いますか

（アンケート有効数：25）



A-1 兪偉躍（とても思う）
会議を通じて報告する。

A-4 張瑾（とても思う）
教職員の政治学習時間を利用して共有する、また旗揚げ式にて、生徒たち及び教員に報告する。

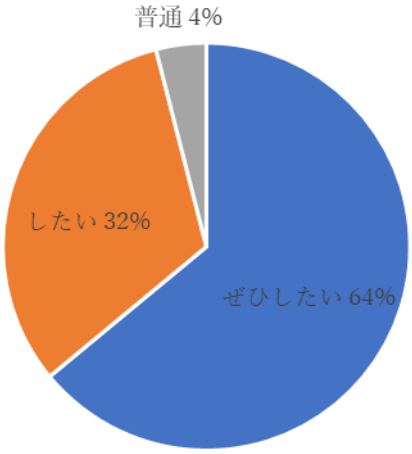
A-15 王燚（とても思う）
1．文化は交流により、良いところを広く取り入れることができる。
2．パワーポイントを作成し、日本での見聞と希望を教員と生徒に伝え、基礎教育ないし人材育成のレベルアップを共に推進するつもりである。

A-23 黄興祥（とても思う）
教師が生徒を愛し、生徒や学校での実際の活動を共有する。教師と生徒の養成教育の中の衛生教育を共有する。

A-24 李富保（とても思う）
はい。私は自分が見た、聴いた、感じたすべてを私の学校の教員と生徒に共有する。
私は得たものをすべて整理し、パワーポイントの形で教員と生徒に別々で解説し、展示し、また実践可能な目標とタスクを設定して実施する。

◆質問 16.教育現場の見学を含む日本での滞在中に見たものや体験したことを自分の教育に活用する、あるいは新たな教育活動の開拓に利用すると考えていますか

（アンケート有効数：25）



A-9 張勤（ぜひしたい）
毎日20分間の活動を設ける。
1．保護者会議を通じて、日本での訪問活動で見た、聞いたこと、特に労働教育に関して共有する。根本的に保護者たちの固有観念を改め、統一し、共に生徒たちの労働力を養成する。
2．教員会議、担任先生会議を通じて教員たちの支援を得る。
3．愛国教育、クラスの定例会を通じて、生徒たちの中で宣伝・共有をし、生徒たちの労働に対する正確な認識を高める。

A-16 易新艶（したい）
生徒の生活上の要求、学習上の要求など、たくさん参考と応用に値することがあった。

A-17 趙学成（普通）
現実に基づいて対策を考え、関連の教育活動を行う。

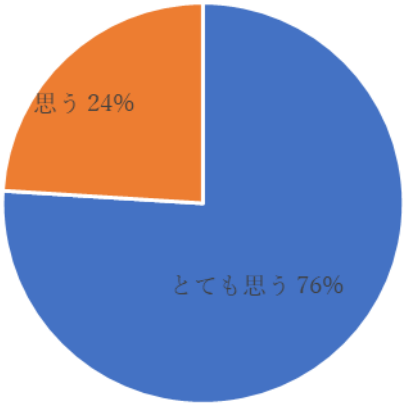
A-22 冉紅艶（ぜひしたい）
日本の教育のよいやり方と経験を中国に持ち帰り、学校の発展と結びつけて、真剣に整理し、学校の発展に新たな力を注ぐ。

A-23 黄興祥（ぜひしたい）
1．生徒の能動的な実践活動を行う。
2．学校の衛生環境を整え、学校あるいは未来の発

展に適したものに改善する。

◆質問 17. 今後、今回の日本の学校の教職員との交流を深め、継続したいと思いますか

（アンケート有効数：25）



A-7 張静（とても思う）

ESD プログラムに参加、毎年の休暇期間に、お互いに研修団体を派遣する。

A-9 張勤（思う）

日中双方学校の教員、生徒間の訪問活動

1．ホームステイを実施する。日本の生徒たちに中国の家庭に招いて、普段中国の生徒たちが学校、家庭、コミュニティでの日常生活を体験してもらう。日本に行く時も同様。

2．体育、芸術、科学技術などにおける交流活動を展開する。

A-14 黄城（とても思う）

学校を ESD プログラムに参加させ、生徒に外に出て世界を見てもらいたい。日本の先生方や生徒も中国に来て、中国の現状を見ることを歓迎する。

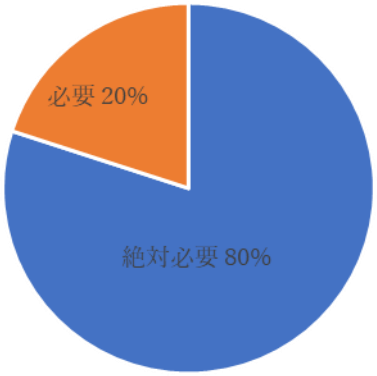
A-19 馬義三（とても思う）

とても思う。日本の同業者がよく中国の各地に来て交流することを願う。教職員の交流以外、生徒同士の交流もとても必要。

A-25 趙鵬麒（とても思う）

交流があってこそ進歩がある。

◆質問 18. 今後、中国教職員招へいプログラムの継続は必要だと思いますか
（アンケート有効数：25）



A-4 張瑾（絶対必要）
視野を広げる、学び合い、他国の教育成功経験を参考になる。

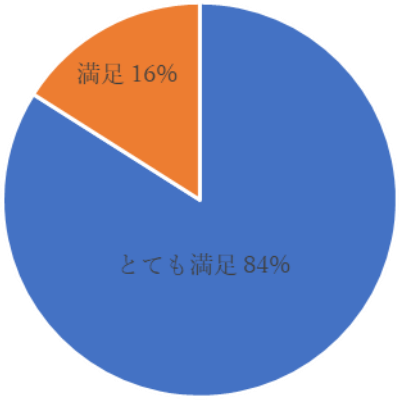
A-5 朱彤吉（絶対必要）
交流があるからこそ、理解が深まる。

A-11 王磊（絶対必要）
教育の交流と協力を強化することは、両国民が相互に理解し、感情を深めるための有効な措置である。国の未来は次世代の教育にある。教育関係者の教育実践の中、継続的に中国と日本の教職員が相互訪問することは、教育の持続可能な発展と国際理解教育に役立つ。

A-21 普義則（必要）
学びあい、長所を勉強し、短所を補い、共に発展する。

A-23 黄興祥（絶対必要）
相互学習は交流を強調するのに役立つ。

◆質問 19. プログラム中の通訳はいかがでしたか
（アンケート有効数：25）



A-12 陳芸（とても満足）
とてもプロフェッショナルで温かいサービスだった。

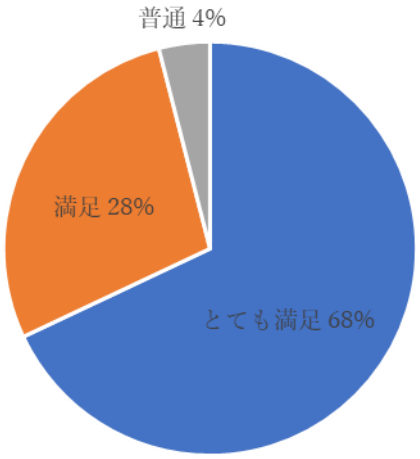
A-19 馬義三（とても満足）
とても満足。言葉が流暢で、対応が良かった。

A-20 張永林（とても満足）
反応が速く、対応も親切で、とてもプロフェッショナルだった。

A-21 普義則（とても満足）
ずっと付き添い、笑顔、ディテールを重視し、真剣に考え、よく通訳し、タイミングよいリマインドにより交流できた。

A-24 李富保（とても満足）
仕事に尽くしています。

◆質問 20.プログラム中の食事はいかがでしたか
（アンケート有効数：25）



A-3 宋懿琛（とても満足）
全体で食べる場合もあれば、各自で自由にさせてもらう場合もあってよかった。

A-9 張勤（とても満足）
日本の地方で特色のある食べ物を楽しめた。とても満足。

A-12 陳芸（とても満足）
豊富、特徴的、美味しかった。

A-17 趙学成（普通）
食文化が違い、食習慣が違った。

A-22 冉紅艶（とても満足）
食べ物は特色があり、とても配慮されていた。

◆質問 21.その他、改善点や気づいたことがありましたら自由に書いて下さい
（アンケート有効数：9）

A-1 兪偉躍
温かいお水を提供してほしい。

A-2 張輝武
温かいお水を提供してほしい。

A-3 宋懿琛
この活動をきっかけに、他の階層間の交流を何回か展開させてもよいだろう。

A-10 陳肖前
1．日程的にややきつかった。少しゆとりができたらよりよい。
2. 日本ならではの文化体験をしたい。

A-16 易新艶
11 月 14 日のスケジュールは時間がきつかった。もう 1 日設けて、14 日に訪問した 2 つの学校をより深く理解できたらよかったです。

◆質問 22.本プログラムを運営しているユネスコ・アジア文化センター（ACCU）について、ご意見やご要望などがありましたら自由に書いて下さい
（アンケート有効数：23）

A-1 兪偉躍
ACCUの親切で丁寧なご招待に感謝。中国への訪問を期待する。

A-4 張瑾
なし、非常に満足した。

A-7 張静
1.質の高い交流機会を提供していただいた。
2.各訪問活動は本当に素晴らしかった。
3.スタッフのみんなに拍手。上海への訪問活動を期待する。生徒+教員+ESD+ACCU（Thanks a lot）

A-11 王磊
1．日中教育の交流レベルと頻度を充実させ、専門教育・高等教育・幼児教育などを含め、各級教育の全面的な交流を行うことをお勧めする。
2．日中教職員の相互訪問人数が等しいように調整し、日本の教職員と生徒にも同様な機会で中国を訪問し、今日の中国教育現状と中国社会を知ってもらうことをお勧めする。日中民間友好事業の発展を促進し、両国の次世代がよりよく接触し、理解と友好関係が増すようにする。

A-21 普義則
中国の教育も ACCU、ESD 教育に加入することを願う。

◆◆総括◆◆

参加者の全員がこのプログラムに対して「とても満足」、「満足」と回答した（質問 1）。
参加者の 7 割が初来日であり（質問 8）、日本の教育全般に対する関心と理解においては、プログラム参加前は「普通」「低い」が 7 割近く、プログラム参加後には「高い」が 6 割、残りの 4 割は「とても高い」と変化があった（質問 9）、プログラムが日本の教育に対する関心と理解を促す一助となったことが示された。同様に、国際理解教育や ESD、日本に関する理解度（質問 11、12）においても、プログラム参加前は「低い」「普通」が 8 割近くを占めていたが、参加後はその数が減り、「高い」「とても高い」に変化した。

今後について、これからさらに日本の教育や文化について学びたいと「思う」「とても思う」（質問 14）、帰国後はプログラム期間中の経験を児童生徒や同僚に報告しようと「思う」「とても思う」（質問 16）、プログラムを通じての見聞、経験を自身の教育、あらたな教育活動の開拓に利用「したい」「ぜひしたい」参加者が 9 割以上～10 割を占めた。
さらに、今回の訪問校の教職員との交流の促進・継続の意思については、参加者の全員がしたいと「思う」「とても思う」と答え、中国教職員招へいプログラムの継続は「絶対必要」「必要」と考える参加者も全員であった。

その他、いただいたコメントの中には、教科別の交流や保護者との交流、ホームビジットを望む声があった。今後の事業計画・運営においては、受入教育機関と相談・連携しつつ、可能性を模索していきたい。

～～～～～

以下に、スケジュールや内容に対する参加者の感想・意見等を掲載する（回答は無記名による）。掲載にあたっては、コンピューターにより無作為に５人分を抽出している（原文は中国語）。

◇オリエンテーション

・説明は非常に詳しくて、具体的で、分かりやすかった。
・事前の準備が完璧で、資料が整っていた。些細なことまで心掛けてくれた。
・大事なタイミングでスケジュールを紹介し、参加者にとっては覚えやすい。
・行き届いた細かい工夫が、訪問団にたいへん温かく感じさせてくれます。全ての流れが分かりやすく、タイミングごとにやるべきことを訪問団に知らせてくれた。
・オリエンテーションがとても良くて、スケジュールが合理的で、内容満載で分かりやすかった。

◇開会式・歓迎交流会（東京）

・開会式：流れがはっきりしていて潔い。日本のグルメを味わった。今回訪問団のタスク、目標ないし希望まで、すべてを分析している。ホテルの温かいサービスが異国にいることを忘れさせ、家のような温かみを感じさせてくれた。
・これはとても有意義な交流会でした。日本側の謹厳で実務的なやり方を直接みることができた。全てが行き届いていて周到だった。私はたいへん衝撃を受け、これは必ず私の今後の学校管理に影響を与え、細かいところまで目を配るようになると思う。学校管理は繰り返しのことであるが、細かいところまで完璧にできてこそ、より良い効果が得られる。
・内容が豊富であり、式が正式的だった。細部にいたるまで ACCU の訪問団に対する重視を感じた。
・盛大な式は ACCU の細心な準備と訪問団に対する重視を反映していた。
・親切で盛大な歓迎会だった。日本文部省の奈良哲様と中国大使館参事官と共に出席していただき、温かいご挨拶をいただけて日中間の長い友好関係に改めて感動した。兪団長は中国訪問団を代表して感謝の気持ちを伝えてくださり、今回の訪問活動を通じて、日本教育の先進的な実践を学び、収穫がいっぱい得られるように期待する。

◇文部科学省訪問（講義を含む）

・歓迎会は盛大だった。講義の資料が完備していて、わかりやすかった。日本の基礎教育に関する説明は先見的で、見解は独特だった。質疑応答も丁寧だった。
・日本の初等中等教育の概要を私に分かりやすく理解させてくれた。管理モデルの基礎を知り、ユネスコスクールの ESD と SDGsの推進と実施を知った。比較、思考と交流を通じ、今後の学校管理に大いに役立つ。
・よく準備されており、とても細かく、ほぼ完璧だった。
・解説が分かりやすく、訪問団に日本の教育に対してある程度認識させてくれた。アドバイスとして、一つの場所の事例を基準に、日本の管理モデルと方法を解説することをお勧めする。
・講義の内容は合理的で説明も詳しかった。資料も整えていたが、質疑応答と交流の時間を設けることを提案する。

◇流山おおたかの森高等学校

・流山おおたかの森高等学校は中国語教育が行われていると同時に、伝統文化と国際交流とが共存しており、参考に値する。
・学校の教員も生徒も情熱的で、生徒の様々な部活動は感動的で印象に残った。
・部活動の教育は非常に特色がある。学校の細かい管理はとてもよくできている。学校の生徒指導はとてもよくできている。
・学校の経営特色が印象深く、学校の課外活動のデザインと実施はわりとレベルが高く、日本の高校の楽しい学びの理念が徹底されていることを体感した。
・教職員同士の交流が足りなかった。

◇気仙沼市教育長訪問

・教育長先生の熱いご挨拶で、盛り上がった
・しなやかな教育者だった。歓迎会のために非常に用心深い準備をしていただいた。インテリアから、茶道の展示、記念品交換まで整っていた。またブレークタ

イムとお花までところどころに思いやりを感じた。気仙沼市のESDプログラム推進と実践も特別だった。海の文化、海からいただき海へ返すという教育を通じて、海を保護し、故郷を愛し、自然を愛することを提唱していた。
・歴史を尊重し、誠意を持って教育に取り組み、持続可能な教育の戦略をもっていた。
・歓迎式が盛大で、細心に準備されていて、感動した。
・プログラムの準備が良く、お迎えから見送りまで、訪問先の熱意と誠意を感じた。

◇気仙沼市教育委員会紹介
・詳しく、はっきり、有効だった。
・気仙沼市のユネスコスクール加盟校の活動が豊富だった。「FISH」理念が印象的だった。
・ESDプログラムの内容が素晴らしかった。
・教育委員会は教育長、教育部長、事務局と教育機関でできており、事務局は主に教育総務課・学校教育課と生涯学習課でできている。
・多種多彩なインターネット資源。学校の特色を保ちつつ、教育機能を次第に充実させていく。

◇気仙沼市立鹿折小学校
・鹿折小学校の1日の訪問を通じて、生徒たちと共に昼食を取っただけでなく、クラスに入って授業も受けた。参加型の学習体験だった。前の訪問と異なって、本当の意味でこころとからだでの体験だった。また、教職員との交流議論は我々の訪問団の考えを深めた。全体的な活動内容から学校の誠意と用心深さが反映されていた。
・親切だった。
・生徒たちと一緒に食事することで温かい時間が過ごせた。今までなく非常に良い体験だった。
・歓迎式が盛大で、内容が豊かであり、生徒と一緒に食事をし、講義を聴いた。段取りはとても合理的で細かく、先生たちは非常に仕事熱心だった。
・1. 細部にわたる教育を重視している。2.生徒指導を重視している。3. 特色のある発展を重視している。
①人材教育②ふるさと教育③防災教育

◇宮城県立気仙沼支援学校
・1.マンツーマン指導は大変よい。特別支援教育にこれだけの教員が従事しているということは信じ難いことだった。
2.小→中→高の3年次の科目設定から見ると、生徒たちの生理・心理あらゆる段階での成長を考慮したうえで教育活動を展開していることが分かる。
3.知的障害のある子どもたちに社会適応のために、自分自身の価値を知り、楽しく生活できるようにすることに目的を置き、それぞれの能力・素質に応じて異なった教育を実施していた。障害のない子どもたちも同じだと思う。
・学校のカリキュラムは独自の特徴があった。先生たちの大変な努力に敬意を表する。これら59人の特別な子どもたちがこの学校に通えることを嬉しく思う。
・スケジュールがたいへんよろしく、日本教育の障害者たちへの重視を感じさせる。学校だけでなく、すべてのメインストリートに点字ブロックが設置されており、日本社会の障害者たちへの重視とケアを反映していた。
・1.感慨を覚えたとともに感動した。日本の特別支援教育における素晴らしい成果に感激した。児童生徒を細心に世話し、教育する先生たちに感動した!
2.日本側はとても上手に説明した。双方の交流は深くて有効なものだった。
・特別な学校だった。一部の障害ある特別支援を必要とする生徒たちに対して、教員たちは愛情をこめて忍耐強く対応しているのを拝見して非常に感心した。一方で、生徒たちは教員の指導の下で、能力に応じることを実行できたり、大人でも上手にできかねる驚くほどの作品を完成したりしたのを見て、何かしらのスキルを身に付ければ、きっと社会で生きていけると思った。

◇気仙沼市立階上中学校
・1.「自助・共助・公助」の学習。
2.「人と付き合う」ことの重要性。
・菅原定志校長は一流の校長であり、防災教育がすばらしい。特に防災テーマの活動が多種多彩です。教育の面は教員の指導能力を重視し、生徒が理想の高校に合格するように努めている。
・学校の生徒の元気の良さと教員のチーム意識が目を引いた。
・生徒の歓迎式とエールの伝統は驚嘆するものだった!教職員はおもてなしが周到で友好的だった。

・防災教育は面白かった。

◇東日本大震災遺構伝承館

・災害で潰された天井、床、ガラス、テスク・椅子を見て、動画で津波に無力な民衆たちを見て悲しくてたまらなかった。当伝承館は日本のあらゆる学校の防災教育基地として、全国の生徒たちに見学・体験してもらい、防災意識を高めてもらえるように期待する。
・1.子どもの防災能力を培うことの重要性。2.子どもの自立能力と環境へ適応することの重要性。
・非常に感動した。このたくましい強い精神に感動した。
・災害は怖くありませんが、災害がもたらした教訓を忘れることが怖いです。伝承館を通じて、人々に災害を覚えさせ、経験をまとめ、幸せな生活が永く続くようにしている。
・1. 日本東大震災についてさらに理解した。
2. 日本の災害復旧に対する強い精神を体験した。
3. 防災・安全知識の重要性を学んだ。
4. 卒業式のスピーチの動画は感動的で、泣きそうだった。「Be strong」。誰もがタフになって、目の前の幸せの日々を大事にしていかなければならないのだ

◇報告会・閉会式

・スケジュールが合理的であり、各方面が高度に重視し、意見がはっきりと伝わりました。意見の共有は、各方面が小異を捨てて大同につくことにとって、大切な機会と場を提供した。
・1.細心に実施され、周到に手配されています。2.まとめが全体的であり、参加者に振り返りを促す機会であった。3.教育の本質があり、視野が国際的です。
・1. 報告会はまとめと振り返りを促した。
2. 質疑応答では、みんなが感想とフィードバックを充分に共有できた。
・まとめの内容は豊富で、感動したし、感激だった。日本側の準備に感謝!
・1. 行き届いた細かい準備だった。
2. 実り多いたっぷりの成果報告だった。
3. 中国に勉強に値するものをもたらした。
4. ACCU の方々に感謝。お疲れ様でした!ありがとうございました!

4. 関係者コメント

千葉県立流山おおたかの森高等学校
教諭 仲田 郁子

プログラムの全体的な感想・印象

これまで本校では、高校生が来訪して生徒同士の交流を行う行事はあったが、教職員のみの来校と交流は、私にとって初めての経験だった。以前韓国の教職員訪問団が来校したことはあったようだが、その時はごく一部の担当者のみで実施したようで、学校を挙げての行事にはなっていなかった。
かなりの職員が代休の中、通常授業ではない（LHR と総合的な学習）時間帯で、思っていた以上に活動できる人員が限られ、ご不便をおかけしたことと思う。私が中国を訪問したときの、各校の至れり尽くせりのご歓待のことを思い返すと、本当に恐縮する思いであるが、本校は地域に密着したごく普通の公立高校のため、その様子をご覧いただけたことは、意味があったのではないかと思う。
印象に残っているのは、到着されてすぐ、本校のグラウンドの写真をみなさんが撮影されていたことと、「修学旅行」に多くの先生方が興味を示されたこと。中国では校庭は舗装されていることがほとんどだと伺ったが、日本では地域差も大きいと思われる。
また修学旅行ですが、日本では多くの学校で 3 年間の最も大事な学校行事のひとつとして位置付けられている。修学旅行の実施がどのように学力向上と結びつくのか、というご質問は大変興味深いものだった。日本では大学入試の在り方が大きなニュースとなっているが、暗記だけによらない総合的な学力を判断しようという方向に進んでいることは間違いなく、そのあたりまで突っ込んだ議論ができるほど時間に余裕がなかったことが残念だった。

児童・生徒の成果

中国語でスピーチをしてくれた生徒は、3週間前から準備をして、何度も本校講師から指導を受けて練習した。とてもよい経験になったと思う。また 1 年9組（国際コミュニケーション科）で生徒が積極的に来訪者に話しかけていたと聞き、よい経験になったと感じている。本校は中国語の授業があるので、今後それを積極的に活かしていけたらよいと思う。

教職員・学校の成果

教職員同士の交流会（教育交流会）は興味深い企画だった。制度は違っても、「次世代を育てる」仕事内容は共通なので、両国の教育について、多方面から考えることができたし、今後さらなる交流が構築できれば素晴らしいと思う。また、ACCU による派遣プログラムに興味を持った本校職員もいた。今後積極的な応募が期待できると思う。

苦労した点・困難だったこと

ACCU スタッフのアドバイスをいただきながら、1 つひとつ進めることができた。ただ当日は 2 学年の代休日であり、また特別時間割で調整に苦慮した。時間が大変限られている中で、昼食後の校内案内が思っていた以上に充実していた様子で、良かったと思う。
生活習慣の違いがあり、召し上がっていただくものなどできるだけご希望に添えるようにしたつもりだが、日本風のおもてなしを味わっていただきたい思いもあった。ねりきりと瓦せんべいを準備したが、ご説明できる時間がなく、申し訳なかった。また、喫煙所の準備はなく、これは全くの想定外で少々あせった。

加えるとよいと考える活動

中国の先生方から中国の学校のことを伺う場面があってもよかったなと思った。今回は、こちらの学校

のことを伝えることを主としていたが、時間をとることができれば、半日ほど使い、ワークショップの形で各学校や行政での教育課題を共有し、お互いの取り組みを比較検討するような時間が取れると有意義かなと感じた。

プログラム改善に向けた助言

本校のようなごく普通の学校を見ていただく機会はこれまでどのくらいあっただろう。両国の学校設備を比べると、日本の公立学校は本当に貧弱で情けなくなりますが、高学力生徒ばかりでなく、多くの生徒がさまざまな活動を通じて成長する場が日本の公立学校であると思うので、今回のような教員同士の交流会が充実すると意義が大きいと思う。

※ACCU により、他の表記に合わせ、特に語尾部分の表現を統一した。

気仙沼市教育委員会
副参事（指導主事） 小野寺 裕史

プログラムの全体的な感想・印象

私たち，教育委員会の職員に対しても，学校の児童・生徒・教員に対しても，非常に友好的な態度で接していただいた。困った様子をみて，話しかけたり，案内をしたりすると，とても感謝している様子を伝えてくれた。

日本の教育に対して学びたいという意気込みが感じられ，各訪問先での質問の内容が自分たちの疑問に即していると感じた。

給食や掃除などを児童生徒と一緒にしているときには，積極的に話しかけたり，一生懸命に聞き取って答えようとしたりするなど，コミュニケーションをとろうとしている姿が印象的だった。

残念だったことは，気仙沼駅前は飲食店が少ない地域だったので，訪問団の方々が夜に食事を十分に楽しむことができなかったのではないかと感じたことである。中国の方の気仙沼の印象を大きく左右することだったので，事前に，中国の方々に，ホテルから行ける飲食店をピックアップし，ルートやメニューなどを伝えておくべきだったと感じた。

児童・生徒の成果

何よりも中国に対する印象が大きく変わったと思う。心をこめて歓迎したことによって，訪問団の方々は，その喜びを表情や態度で現していたことにより，「中国の人は，優しい。」「中国の人に親近感を覚えた。」という声が聞かれた。

また，階上中学校では，中国語ではなく，英語でのコミュニケーションを中心として会話をしたことで，自分たちが学んでいる外国語の必要性や有用性を肌で感じることができた。

小学校では，中国のことをもっと知りたくなったという児童もみられるなど，外国に対する興味関心の高まりがみられた。

教職員・学校の成果

教育委員会では，公式に中国の方々を迎えいれたのは震災以降では初めてであった。慣れないながら，どのようにしたら中国の方々に歓迎の気持ちが伝わるかを考えることができた。このことが，職員の公務員として必要な「おもてなしの心」に改めて気づくことにつながった。また，日本の文化の良さの再確

認にもなっていた。

子供たちと同様に，報道等によってつくられた中国人のイメージが大人の中にもあり，当初は，どのように接してよいか不安になっていた職員もいたが，実際に接し，熱心な様子や，楽しそうに文化体験などをする様子から，親しみを感じるようになっていた。

最終日前日の夕方に，教育委員会から帰る中国の方々を見送るために，ロビーで大型プロジェクターを利用した活動の様子を映すなど，喜んでもらおうという気持ちが大いに高まっていた。

中国の方も，日本の受け入れ側も，人としてしっかりと交流すれば，国や文化の違いに関係なく信頼関係が築けることを感じていた。

苦労した点・困難だったこと

気仙沼市での訪問全体に気を配らなければならず，関係各所との連絡や依頼が多くなり，他の業務を多く抱える身としては，大変であった。

気仙沼市の滞在の中で，水産都市としての魅力についても感じていただきたいと考え，魚市場見学や給食のメニューの工夫などを行った。このことは，ある程度，感じていただくことができたと思うが，食文化の魅力や自然に恵まれた風光明媚な地域としての魅力は，十分に伝えることができないプログラムとなった気がする。

滞在中の期間，教育委員会職員の帯同を依頼され，全ての時間を共に行動したことは，プログラムのスムーズな運営に協力できたと感じるとともに，中国の方々がどんな学びやコミュニケーションをするのかを知るうえ良かったと思うが，教育委員会の担当者が一人であるため，他の業務の滞りになったことも事実である。職員の少ない市町村では，他の部局との連携による対応が必要であると感じた。

加えるとよいと考える活動

今回小中学校で行われたような給食体験や掃除など児童生徒と直接コミュニケーションを図ることができるプログラムは，非常に有意義であると感じた。

東京で行われたような歓迎会も大切であるが，訪問地においては，大きなレセプションではなく，訪問校の先生方との「懇親の場」があると互いのことを理解するうえでよいと感じた。

滞在中に，日本のよさや仲間とのつながりをつくるということも大切なので，観光という視点でのプログラムもあるとよいのではないかと感じた。

プログラム改善に向けた助言

今回は，担当の伊藤さんに事前に気仙沼に来ていただくなど綿密な連絡をとりながら受け入れをすることができた。受け入れの地をよく知ることは，よいプログラムをつくるための大前提であると思うので，現地に赴いていただき，関係者と話す機会をしっかりともつことが大切であると感じる。初めての訪問地である場合の事前訪問は，一日の滞在ではなく，二日くらいの滞在は必要であると思う。

訪問校への準備金は、プレゼントを含めて1万円であるが，自分たちでお金を捻出して準備しているところもあると思う。増額ができるならばありがたいと感じた。

本市は，今回の受け入れにより，受け入れのノウハウができたので，今後も機会があれば受け入れが可能であると感じる。

気仙沼市立鹿折小学校
校長 浅野 亮

プログラムの全体的な感想・印象

・中国の学校教育に志高く，取り組んでいる教員と交流する貴重な機会が得られた。持続可能な社会の創り手を育む教育の方向性をテーマにした話し合いでは，情報化社会で愛国心をどのように育てるか，そのために重視する学習能力をどう捉えるかという2点を中心に具体的な現状と課題を共有できた。通訳を介して伝えられる中国の教員の熱い思いに触れ，自分のモチベーションが高まった。
・中国の教職員が，小学1年の段階が一番重要で，学習，姿勢，文字，発音，集中力などの習慣形成を重視していることや教員自身も毎年試験を受け，優秀な教員が担任を継続できるという話が印象的だった。
・中国の教員の自信を持った意見の述べ方に圧倒された。日々精進がうかがえた。
・中国教職員と児童とが給食を通じて直接触れ合えたことがよかった。中国教職員が児童と積極的にコミュニケーションをとろうしており，安心できる交流となった。
・清掃時に児童に加わって一緒に清掃活動（雑巾がけ等）を行っていた姿が印象的。
・中国の教職員と直接教育に関する考え方について話し合う良い機会となった。
・中国の学校では，日本のような給食や掃除のシステムがないことで，関心高く視察されていたことが印象的だった。

児童・生徒の成果

・中国の方々と給食を通じて直接交流できたことで異文化に触れることができた。
・言葉が通じなくても，ジェスチャーや絵などを用いながらコミュニケーションを図ろうとする態度が育った。
・児童は簡単な中国語ながらも，言葉でコミュニケーションをとることができて喜んでいた。言葉は分からなくとも，表情や身振りなどで相手が何を伝えたいのかを考えようとしていた。
・中国教職員に触れ合うことで，実際に中国語の発音を聞き，積極的に中国語を話そうとする姿が見られた。初めてのことにもチャレンジしようとする意欲や関心をもつことができた。
・英語学習でのALT以外の外国人と触れ合う機会はそうあるわけではないので，今回30名余の中国の教職員を迎え，食事を共にするとともに親しく触れ合ったことは国際交流の原体験の一つとして有益であった。
・中国の教職員を迎えるにあたり，中国語で歌を練習するなどの諸準備は，人と関わる時の相手を理解し尊重する態度として，日常生活にも生かせる学びの機会にもなった。
・日中両国の関係は良くないニュースも聞くが，直接顔を合わせて話せば心が通じ合うことと，その喜びを味わえた。
・歓迎セレモニーに向けた準備，練習を通して，おもてなしの心を育むことができた。

教職員・学校の成果

・中国に対するイメージはあまり良くなかったが，直接会って触れ合うことで印象が変わった。国である中国と中国の人々は必ずしも一致しないことが分かった。
・国が違っても，教育観や教育方法に，共通点がたくさんあることを学んだ。
・同じアジアの国でも，学習や将来に向けての対応など，共通することもあるが意識の違いを感じ取れた。
・中国の教職員の教育にかける思いを肌で感じ，本校の取組をさらに充実させようと意を新たにするきっかけになった。

・日本を代表する小学校として見られるので，児童も担任もより一層学ぼうとする気持ちが高まった。

苦労した点・困難だったこと
・通訳の方がもっといると良かった。
・給食時の通訳をもっと増やしてほしかった。
・通訳を介したので時間設定に難を感じた。
・保護者の中に中国出身の方がおり，歌や言葉の発音を教えていただいた。その方も児童もとても喜んでいた。

加えるとよいと考える活動
・卓球台を出しておいて，児童と卓球交流をさせてみたかった。
・中国の学校の様子を映像で見せていただくとよかった。

プログラム改善に向けた助言
歓迎セレモニーと提供授業以外は，平常通りに授業ができたので良かった。

宮城県立気仙沼支援学校
主幹教諭　及川　樹美

プログラムの全体的な感想・印象
・学校概要説明の際は，時間が長かったことや内容が難しいこともあるのか，退屈させてしまい，工夫が必要だったと感じた。（文化の違いと思うが，スマホを操作している方も少なからずいた）
・学校見学の際は，高等部の作業製品に関心をもって見ている姿も見られた。一方，特別支援学校の教職員の待遇（賃金など）に関する質問も多くあり，制度的なものに関心があるのかと感じた。

児童・生徒の成果
一部ではあるが，高等部のある作業班において，生徒自身から直接，自分たちの作った製品を，訪問団の代表の方へ，記念品として手渡す経験ができた。海外の方々から（多くの方々から）見ていただく中で，作業する経験ができたこと。

教職員・学校の成果
中国における“特別支援教育の在り方”の一端を垣間見ることができた。特に障害者の職業専門学校の先生からは，実践内容等について詳しくお話いただき，日本の教育との共通点や相違点について知ることができた。

苦労した点・困難だったこと
・コミュニケーションの面（言語の違いから，通訳はあったものの，ニュアンスをうまく伝えたり，理解したすることの難しさを痛感した。）
・本来であれば，児童生徒との直接的な交流をプログラムに組み込めればよかったと思うが，時期的に，事前学習の時間がとれず難しかった。大きな学校行事（学校祭）直後の訪問だったため，児童生徒の実態を考慮し，授業参観や講話・講義中心のプログラムとした。

加えるとよいと考える活動

（回答なし）

プログラム改善に向けた助言

今回の訪問団の方々の様子を見ていると，説明や見学にあまり関心がないように見受けられた。こちらとしても，相手方のニーズをうまくとらえ切れないまま，企画した点が原因かとも思う。何を求めているのか何を知りたいか等，具体的に伝えていただくとさらによかったのではないかと感じた。

気仙沼市立階上中学校
教頭　高須　由美

プログラムの全体的な感想・印象

・生徒が給食の時間に中国の先生方と直接交流することができたことがよかった。
・印象に残る発言は、「地震，そして津波という想像しがたい甚大な被害を受け、辛い思いをしてきたのにもかかわらず、こうして前向きに防災学習に取り組めている姿勢がすばらしい。どうやってこのような教訓を生徒達が積み上げてきたのか、興味を持った。」という内容である。（団長さんの発言）

児童・生徒の成果

言葉が異なっても、「伝えよう」「理解しよう」という気持ちを持ち、行動に移すことで、世界のだれとでもコミュニケーションがとれるということを体験を通して実感できたこと。

教職員・学校の成果

・異文化を理解する姿勢や態度
・日本と中国の学校制度の違い（英語教育、理科教育に力を入れていること等）

苦労した点・困難だったこと

通訳の関係でということで、直前（前日）になり、挨拶の原稿等を求められたこと。

加えるとよいと考える活動　（回答なし）

プログラム改善に向けた助言

・参加者の研修に臨む姿勢に疑問を感じた。参加者の研修に対する意欲が二極化していたのではないかと感じた。
・もう少し目的意識を持った方々が参加すべきだと感じた。
・夕方の寒い時間、本校生徒が震災遺構をガイドしたが、寒いという理由で生徒のガイドを聞かず、その場を立ち去るなど、教育者としての資質が疑われる態度がみられた。貴重な時間を費やして、生徒に活動をお願いしています。オリエンテーションでしっかりと話すべき。文化の違いだけでは済まされないのでは。
・英語はもう少し通用すると思っていたが、ほとんど通じなかった。事前の情報がほしかった。

事業担当者コメント

訪問機関や訪問校での質疑応答では、オリエンテーションで配付したハンドブックにある学校・機関概要や実際の学校見学を通じて生じた疑問や考え等を訪問団が訪問先に伝え、訪問先の説明により学校が取り組む教育について理解を深めることができます。一方で、答える立場である訪問受入側にとっては、中国の教育事情について知る機会が多くありません。受入側にとっても相手国について学ぶ機会をプログラム期間中に少しでも増やしていきたいと考えていました。

この考えを理解し、実現に手を貸してくださったのが気仙沼市立鹿折小学校の校長淺野亮先生や教務主任の尾形順子先生でした。事前の打合せで、このプログラムや ACCU として取り組みたいことを話し合い、その後もメールや電話で直前まで何度もやりとりしながら、進めていきました。参加者の発言機会を増やすには、少人数グループをつくることが効果的ですが、そもそも日本側の先生方がその場にいなければ、交流できません。今回の交流会では鹿折小学校の先生が 20 人近くも参加してくださり、6 つのグループで日本と中国教職員が「持続可能な社会の担い手をつくる」テーマのもと、さまざまな点について学び合いました。その内容は先に記したとおりです。

ただでさえ、日本の教育現場、特に教員に求められることは日々多く、このような海外からの訪問団を受け入れる非日常的なことに関わっていくことは、さらに現場に負担を強いるという考えが少なくないかもしれません。また、受入先の管理職のみならず教育実践の最前線にいる先生方のご理解やご協力なしでもこのプログラムは成立しません。そのような中で、気仙沼市教育委員会の小野寺裕史先生や流山おおたかの森高等学校の仲田郁子先生は本事業を学校や地域の貴重な機会と捉え、学校内や訪問先の先生方と連携し、学校や地域が一丸となって力を尽くしてくださいました。このような状況の中で、事業としてどれほどの価値を提供できているのか、自分自身がどれほど貢献できているのかを問いつづけ、よりよい質のプログラムをつくり出していかなくてはならないと感じました。

今回のプログラムに携わってくださった、すべての先生方、児童・生徒の皆様、関係者の皆様にあらためてお礼を申し上げます。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
国際教育交流部　伊藤　妙恵

付録

付録①：写真

オリエンテーション・歓迎交流会

俞団長（右）と MEXT 大臣官房国際課奈良課長（左）

俞団長（右）と ACCU 杉江理事（左）

中華人民共和国駐日本大使館
胡志平参事官（左）のあいさつ

訪問団と 6 月に訪中した日本教職員

訪問団

集合写真

文部科学省

張秘書長（左）と MEXT 弓岡初等中等教育局国際企画調整室専門官（右）

講義を聴く様子

千葉県立流山おおたかの森高等学校

勝井校長によるあいさつ

施設見学（図書館）

生徒の作品を鑑賞

授業見学中、生徒と中国語で交流

気仙沼市教育委員会

小山淳教育長より歓迎のあいさつ

訪問団団長（左）と教育長（右）の記念品交換

訪問団からの質問（冉紅艶・中央）

茶道の文化体験

魚市場見学

電動フォークリフトに乗って水揚げ体験

気仙沼漁師世界地図

気仙沼市立鹿折小学校

給食の準備

授業見学（算数）

教育交流会

鹿折小学校教職員のお見送り

宮城県立気仙沼支援学校

質疑応答

張瑾（左）と熊谷教頭（右）による記念品交換

気仙沼市立階上中学校

全校生徒によるエール

授業見学（防災教育）

王磊（右）からお礼のあいさつ

質疑応答

東日本大震災遺構・伝承館

階上中学校の生徒（左側）による案内

震災の影響を目の当たりにしている様子

報告会･閉会式

文部科学省大臣官房国際課
国際戦略企画室長三輪善英よりあいさつ

兪偉躍団長のあいさつ

鹿折小学校　千葉順子教諭（右）の感想

気仙沼教育委員会　小野寺裕史副参事
（指導主事）（正面）の感想

集合写真

付録②：新聞記事

三陸新報

2019 年 11 月 15 日（金）一面記事

(3) 2019年(令和元年)11月15日 金曜日 三陸新報

防災、海洋教育も

鹿折小 中国の教職員が視察

中国の教職員が12日から気仙沼市を訪問し、市内の学校で行われているESD（持続可能な開発のための教育）の取り組みなどを視察している。13日には鹿折小学校を訪れ、児童と交流した。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が文部科学省の委託を受け、2002年から実施している招へいプログラムの一環で、気仙沼市への訪問は3回目。東日本大震災後は初めてで、以前からの環境教育に加え、防災や海洋教育などにもESDが拡大したことから、9年ぶりに視察に訪れた。

来市しているのは、上海市や雲南省の小中学校、高校などに勤務する教員など25人。初日の12日は、歓迎交流会で茶道を体験するなどして日本文化に触れた。

13日は、気仙沼魚市場で水揚げの様子を見学した後、鹿折小を訪問。全校児童による中国語の「きらきら星」の合唱などで歓迎を受けた後、5年生の海洋教育や4年生の少人数指導の算数の授業を参観した。昼食時には、児童と一緒に給食を味わいながら交流を深めた。

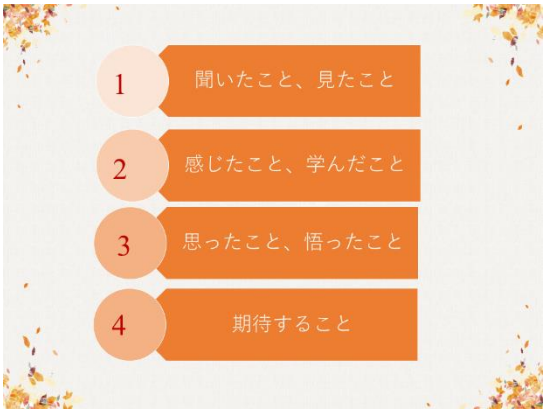
上海市の小学校に勤務するチョ・サイピンさん（39）は「学校の雰囲気が温かい。漁船などの地元産業を教材にうまく活用している点も素晴らしい」と話した。

一行は15日まで気仙沼に滞在。14日には市東日本大震災遺構・伝承館を訪問し、階上中の生徒たちの案内で旧気仙沼向洋高校舎などを視察した。

鹿折小で児童の歓迎を受ける中国の教職員訪問団

付録③：中国訪問団の報告会資料

＊パワーポイントの原本は中国語表記であるが、ACCU により日本語翻訳したものを掲載している。



日本の高校教育を見学

11月11日千葉県立流山おおたかの森高校

日本の公立小学校教育を見学

11月13日気仙沼市立鹿折小学校

日本の特別支援学校を見学

11月14日宮城県立気仙沼支援学校

日本の公立中学校

気仙沼市立階上中学校

日本の公立中学校

気仙沼市立階上中学校

魚市場見学

気仙沼魚市場

2

感じる

と

学ぶ

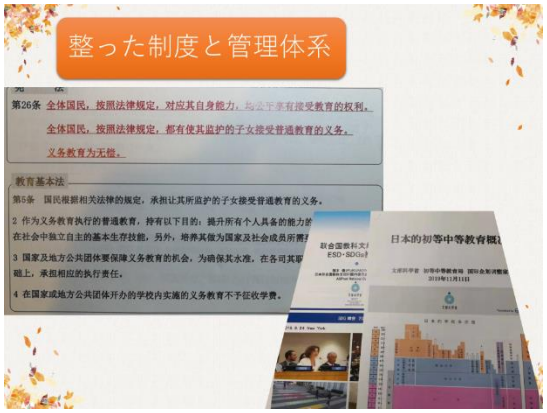
細かいことに対するこだわり

ルールを守る意識

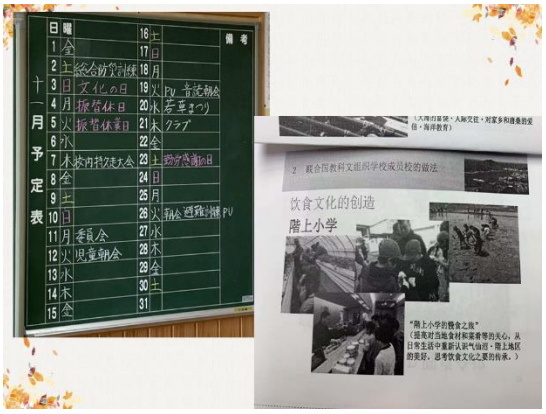
独特の文化

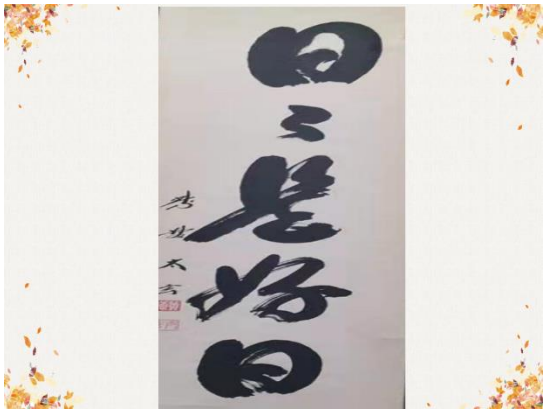
03
思
と
悟
宮城县
气仙沼市
东京都
千叶县
流山市

整った制度と管理体系
良好な社会連携の仕組み
明確な育成目標
プロフェショナルな育成精神


整った制度と管理体系
第26条 全体国民，按照法律规定，对应其自身能力，均公平享有接受教育的权利。
全体国民，按照法律规定，都有使其监护的子女接受普通教育的义务。
义务教育为无偿。
教育基本法
第5条 国民根据相关法律的规定，承担让其所监护的子女接受普通教育的义务。
2 作为义务教育执行的普通教育，持有以下目的，提升所有个人具备的能力
在社会中独立自主的基本生存技能，另外，培养其做为国家及社会成员所需
3 国家及地方公共团体要保障义务教育的机会，为确保其水准，在各司其职
础上，承担相应的执行责任。
4 在国家或地方公共团体开办的学校内实施的义务教育不予征收学费。
日本的初等中等教育概

明確な育成目標
【基本理念】
热爱大海和绿意盎然的家乡，培养胸怀大志，富有人情味和创造力的可持续发展社会建设的接班人
信息的解读能力
科学思考・判断的能力
F（Foresight）“远见”
I（Insight）“洞察力”
S（Strategy）“开拓力”
H（Harmony）“凝聚力”





ありがとうございました。
中国でお会いすることを楽しみにしております！

付録④：これまでのプログラム実績

実施期間	開催地	訪問人数
第1回： 2002年12月1日～14日	東京都、和歌山県、岡山県、広島県、高知県、 大阪府、京都府	97名
第2回： 2003年11月26日～12月9日	東京都、熊本県、愛知県、島根県、徳島県、 大阪府、 京都府、奈良県	100名
第3回： 2004年11月18日～12月1日	東京都、宮城県、長崎県、宮崎県、沖縄県、 大阪府、 京都府、奈良県	99名
第4回： 2005年10月18日～31日	東京都、長野県、福井県、和歌山県、宮崎県、 大阪府	101名
第5回： 2006年10月18日～31日	東京都、千葉県八街市、埼玉県、岐阜県、高知県、 山口県柳井市、大阪府、奈良県	135名
第6回： 2007年10月16日～29日	東京都、千葉県八街市、岡山県総社市、 富山県南砺市、三重県、岐阜県、大阪府、奈良県	135名
第7回： 2008年10月14日～27日	東京都、宮城県気仙沼市、福島県、京都府与謝野町、 香川県、福岡県北九州市、大阪府、京都府	133名
第8回： 2009年10月13日～26日	東京都、岡山県総社市、熊本県植木町、沖縄県那覇市、千葉県成田市、埼玉県さいたま市、大阪府、京都府	142名
第9回： 2010年10月12日～25日	東京都、秋田県大仙市、滋賀県近江八幡市、宮城県気仙沼市、長崎県壱岐市、長崎県、大阪府、京都府	130名
第10回： 2011年10月12日～23日	東京都、山口県美祢市、熊本県荒尾市、東京都多摩市、岡山県総社市、徳島県、大阪府、京都府	134名
第11回： 第1班：2013年11月13日～24日 第2班：2013年12月1日～10日	第1班：東京都、大阪府 第2班：東京都	第1班：50名 第2班：49名
第12回： 2013年10月20日～28日	東京都、熊本県荒尾市、岡山県総社市、長崎県長崎市、和歌山県、大阪府	59名
第12回：（追加プログラム） 2014年9月21日～29日	東京都	29名
第13回： 第1班：2014年10月19日～27日 第2班：2014年11月16日～24日	第1班：東京都、東京都多摩市 第2班：東京都、熊本県荒尾市、長崎県長崎市、福岡県	第1班：34名 第2班：63名
第14回： 2016年1月18日～24日	東京都、熊本県荒尾市、長崎県長崎市、石川県小松市、福岡県	98名
第15回： 第1班：2016年11月7日～13日 第2班：2016年11月28日～12月4日	第1班：東京都、高知県 第2班：東京都、奈良市、京都府	第1班：20名 第2班：20名
第16回： 2017年11月14日～21日	東京都、横浜市、京都府	29名
第17回： 2018年11月4日～10日	東京都、福岡県大牟田市	25名
第18回： 2019年11月10日～16日	東京都、千葉県、宮城県気仙沼市	25名

計 1,707名

※2003年度から2017年度は国際連合大学「国際教育交流事業」として、2018度以降は文部科学省「初等中等教職員国際交流事業」として、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターが委託を受けて実施・運営。

文部科学省委託 2019 年度初等中等教職員国際交流事業

中国教職員招へいプログラム 実施報告書

2020 年 1 月
編集・発行 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町 1-32-7F 出版クラブビル
電話 (03)5577-2853
Email accu-exchange_ml@accu.or.jp
URL http://www.accu.or.jp

©2020 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)